特54
17

第五回 幻術

戀闇鵜飼燎

五幕目

一大磯立場茶屋の場　一小田原宿相撲屋の場

一酒匂川熊藏殺の場

本舞臺三間の間常足の二重葭葺の此正面上の方一間の押入戸棚裏中一間反古張障子出這入あり下の方鼠壁すつと上手一間の障子家臺いつもの所竹籬戸の門口此外正面葺下しの下家此前ゑ生垣二重の下の方軒口へ草履草鞋を釣し駄菓子の箱を並べ都て大磯宿女衒の内の体門口ゑ山裾を下し下手の樣先きゑ裾身箱根の八同田丸の十單物脚半草鞋掛ゑて腰をかけ居る此見得馬士唄ゑて幕明(八)おんぼ取れる物が無いといつて先刻から己ッちが斯して見世へ來て居のゑ出て來ねへとい無用心お事だ(十)受賣物を見世へ並べて商賣をするのいはんのぼく除乞食がヤッヤたわしを賣のと同じ理屈の山女衒だ(八)草鞋や駄菓子を盗まれても僅三錢か一錢の賣物だから氣安からふが此間から此方の内へ來て居る玉い素敵お代呂物彼女を盗まれたら大變だらふ(十)東京から來て居と音が此大磯へ(の里數と同じで年も丁度十六七人柄のいゝ新造ッ子い何處から連て來たのだか何れ女衒の喰物ゑ賣れる娘ゑ連へね(八)ソリヤア年中其樣お事で世を渡ッて居三五郎だ高へ聲じやア云れねへが勾引して來た玉かも知ね(十)何ゑしろ己達ゑ駕を持せて來て呉ろと先刻頼みゑよこし乍ら見世ゑ居ねへとい氣樂お人だ(八)奥ゑ居だらふ呼で見ろ(十)オイ三五郎さん〳〵ト呼ぶ正面の障子を開女衒三五郎和形ゑて出て來り(三五郎)オヽ八公か未だ早へから出直して來て貰てへ(八)イエ何せ此頃い車流行で駕屋い閑でムへ升から早く〳〵見世で待升う寛悠支度を被成まし(三)イヤ日暮ゑ成ね(じやア己の方の都合が悪い見世で待のも退屈だらふから棒鼻へでも往て來ねへ(十)日暮方が宜と音のい吊ひでもお出し成るのか(三)エヽ延喜の悪い事い云ねへものだ(十)然じて何處へ暮方から駕を遣のでム(升(三)小田原の相撲屋迄送つて貰ひて へ物がわるのだ(八)夫じやア彌〳〵彼玉を(三)何だと(八)イエナニ急ぎでおいから棒鼻へ行時刻を計つて出直さう(十)夫じやア駕い此儘ゑ此方の見世へ置て行升(三)邪魔お ら其處

明治十九年六月二十日大審院

置て行ね へ(八、十)とう〳〵今夜賣れるのか(三)エヽ聞き咎める(八)イエ今夜の仕事を引當ゑ(十)立場で一杯飲て來升ト両人橋懸りへ這入跡を見送つて(三)何でも當時い東京も上方玉が流行ので吉原ゑじめ根津品川何處の内でも西京や大坂廻りへ買出ゑ出懸る世界ゑ山女衒も味へ仕事い絶無そてを一番氣を替へて東京種の上玉を今景氣のいゝ小田原へとめる積りで出懸たが面が良れゞ代が高く所詮營業した奴い此方の手ゑい乘ねへと生お地物を引攫ひ此間から脱付れど否と冠を堅ゑ振相摸女と事替り東京育の箱入い扨〳〵開けぬ物だナアト○宜敷思入合方キッパリとおり正面の障子を開三五郎女房お角結髪和形序幕のお夏を連て出三五郎此体を見て氣を替へ態と腹の立仕打ゑて(三)エヽ義理も恩も知ね へ女の面を見のも癪お障る己の方ゑも仕樣が有から奥の戸棚へ押込で置け(お角)アレサお前の樣ゑ然憤怒てい懇まる咄しも懇らおいからマア私ゑ任せてお置○ト宜しく下ゑ居て(角)モシお夏さん其樣ゑ泣てゞッかりお在でい良夫や私し迄が無理お事でも言樣で世間の手前も良く無わけ私い其場ゑ居おいから委しい事い知おいがお前が頼んで東京から旅へ出度とお言故此大磯迄連て來て此間から内へ置ゞ其入用の出所を奉公ゑゆき賃ふのいこりや當然でムんすゞへ(お夏)イエ〳〵私や旅抔へ出度といヤ升ぬ夫を無理ゑ連て來たのでござりまする(三)ナニ言ねへ事があるものか犬ッころじやア有るめへし否だと言ふのを首ッ玉へ縄をつけて引張てつれて來れるものじやアね へ頼む時ゑやア手を合せ己ゑ縋つて置おがら此方の頼みが聞れぬたア此樣分らぬ奴いねへ夫だから打捨置して戸棚へ打込で置けといふのだ(角)成程お前の言通り通し車で東京から此大磯迄連て來のい安い金でい出來おい事頼まれもせず酔狂お能が連て來升うぞコリヤお夏さん今と成り頼まおいとお言でも其言譯い立まいぞ へ(夏)サア頼んだと仰しやれゞ頼み升たゑ致しても夫い宜しふムり升が勤め奉公ゑ出升のい何卒お免し下さい升通し車で東京からお連被成て入用の懸り升たい私しも心得て居升れゞ内へさへ歸り升れゞ其お禮い致し升るお世話序でゑ東京の内へお送り下さる樣三五郎さん へ内儀さんからお執成下さり升(角)執

成て呉とお言でも何言譯で内の人へお前が頼んだ事だやら委しい事を知ぬから執成といふ譯よい行ぬ内の人へ頼んで居(夏)モシ三五郎さん宅へさへ戻り升れバ何様よも急度沒禮い致し升から何卒お慈悲よ東京の内へ送つて下さい升(三)ソリヤア近へ所あらお前の内へ連て行て禮を貰つて入費を埋己も難場を防ぐけれど何を言よも急場の事其様お手遲い事い出來ねへ(夏)夫でい何でも私しい勤めよ行ねバ成升ぬかト合方替つて(三)昔と違つて此節い便利お滝車が出來て居れバ神奈川迄も鉄道の下等へ乗バ手輕だが夫も和女が吃驚がして否だと言から人力で廿里足ずを急がせたから中〳〵安い金じやアねへ其上斯して据膳で此間から内へ置藥用の世話や何や彼や雑用雑費の金高い凡と積つて四五十圓無駄お入費の懸損で只さへ苦しい此暮しも和女のお蔭で火の車廻り兼りやア嘆アよ迄二本棒だと輕蔑れ女よ癡い己だから年の行ねへ娘よ迄欺されたかと言れるのが實の所い悔しいから少日の間小田原の樂お所へ奉公させ夫で後ぎを付るのだ否だと言ア仕方がねへ逆さよ釣して癡つても鼻血の外い出めへから五十圓といふ大金の穴い所詮埋らねへ此間中東京へ出て居る内よ讀で見たとんだ今日新聞だが活膳を取金よして入費の穴を埋るから其氣で覺悟を仕やアがれト急度成て立懸るを止(角)アレマア短氣お待成んせ夫でい此子が憫然もあマア〳〵私よ任せてお呉ト宜敷下よ居させ思入有て、モシお夏さん任侠強い内の人が向よ成て腹を立と無闇お事も仕兼おいから強情張ずと少しの内奉公よ出と極てお仕舞ツリヤモウ誰でも始めよい女郎の勤めよ遣れるのい身を切れるより愛い抔と思ひ違ひをして居れど其又道へ這入て見と寧氣樂お勤めの身殊よ今でい何地よも撿査場といふ物が有バ悪い病を引受る氣遣ひの無のが安心悪い事い言おいから奉公よ出と極てお仕舞ト言共お夏默つて泣て居る(三)エ、夫程よ譯を言ても返事をしねへ強情女ぐる〳〵卷よふん縛り腹を裂から覺悟しろト又立懸るを止て(角)アレまア私よ任し成んせ(三)出又庖丁を研で來から夫迄手前押へて居ろトお角よ呑込せ三五郎奥へ這入お角跡を見送り思入有て(角)鬼の女房お鬼神とやら嘸私し迄同と様よ邪慳お者と怖しくお前思つてムんせうあア(夏)サア夫ハト思入合方替つて(角)私の亭主で言でいおいが年中此様お事をして世渡をする邪慳お人其様お心と知ずして夫婦よ成たが身の誤り今更と成別れたいと此方の口から切出せバ殺し兼おい悪黨故餘儀おく私も斯して居れどお前を傍から執成て助ける様よした所が却て私しも俱々よ難儀をせねバ成ぬから今の様よい言物の心の内の痛惜さい女子同士の世の人情悪いと知て連添も退よ退れぬ夫婦中爰の所を酌量て否でも有ふが勤めよ行直と先から郵便で内へ居所を知せて迎を待て戻るとも先から迎て戻るともそこいお前の勝手おれど所詮爰から迎していい私しも難儀をする事故見迎す譯よい成ぬわいナト奥を憚る仕打宜しくお夏も思入有て(夏)よふ敬へて下さり升た然言譯でムい升おら得心をして奉公よ參ると極るでムり升ふ(角)夫おら得心してお呉か夫で私しも安心し升たト此時馬士唄よ成向ふより前幕の熊藏若流し三尺帯白足袋尻端折草履よて菅笠を持出て來り花道よて(熊)何でも軒よ草履草鞋が釣して有と樺鼻の休んだ茶屋で敬へたから向ふの内よ迎へいねへ三五郎が居て呉れりやアいゝがト鍔臺へ來たり門口より内を覗いて、ハイ免おせへト内へと入る(角)陽道中のお客さんお買物でムり升か(熊)イエ買物じやアムへ升んが三五郎さんのお住居い此方の内でムへ升か(角)ハイ此方でムり升が何方からお出でムい升(熊)私ちやア東京の熊藏と言者だが三五郎さんがお内おら一寸逢せて下せへ升トお夏是を聞顔を上(夏)ナニ東京のお方とおト此方を見る熊藏お夏を見て(熊)オヽお前い先日のお嬢さん未此方の内よ居おすつたか(角)夫おら此子を知てお在の(熊)ハイ枕橋の雨舎で折能此子よ出合た者サト爰へ奥より以前の三五郎出て來り熊藏を見て(三)聞た聲だと思つたが熊さん能く出て來おすつた(熊)オヽ三五郎さん内よ居たか漸とのことで尋ねて來た(三)サア〳〵此方へ上んおせへ(熊)夫じやア異平陽免おせへト二重へ上り宜しく住ふお夏い始終氣味の悪き仕打(角)もし安心をし成んせ此子が得心したわいナ(三)何だ得心をしたそいつい有難へ早く奥へ連ていつて髮でも撫付て遣るがいゝ(熊)夫おら何方ぞよ口が有て(三)何サ小田原の樂お所へ客分同様安給金で少日の間遣積りだ(熊)

ソリヤア何よしろ仕合だ寶物よい花とやら成丈直をよく寶る樣よ(三)エヘン〳〵ト紛らす仕打(熊)ナニサ成丈見能して向ふの氣よ入樣よしあせへ(角)夫あらお夏さん奥へお出(夏)何卒此身も東京へ(角)ハテマア私よ任せておいて熊さんとやらお話し被成ト唄よ成お夏を無理よ連てお角奥へ這入る跡見送つて(三)何の用で出て來たか今見る通りあの女子が毎日〳〵泣て居るので己ア大きよ持餘したト是よりまた合方替つて(熊)鷲かうしかあら能啼くのが直よ成が娘のメソ〳〵泣虫よい持餘したのも尤もだ併し是から女郎よ成床へ廻つてあの玉がすゝり泣でもした日よやア是等も隨分價値ものだ(三)イヤ是から價値が出かい知ぬがあれから直よ旅行の通し車で夜道を掛漸との思ひで連込むと其晩からの泣ッ面揚句の果が血の道で飯も喰ずよ寐て居るのを欺し賺して藥を呑せ二三日跡よ漸〳〵と餌付て枕が上つたから夫から徐々勸め出し得心したのも只た今其處へ足下が來と言い始終の樣子を門口で立聞でもして居た樣だ(熊)實い己もあの娘を足下が疾よ何方ぞへとめ味へ汁でも汲てるだらふと割を貰ひよ出て來たが今當人が得心してとめ込所へ來合すとい誂へ向の好都合だ然して何方へとめ込のか其賣先の内が聞度(三)箱根へ離宮が建たので錢廻りがよくいそがしい小田原宿で流行見世の相撲屋といふ貸座敷で東京玉が欲いと言ふ所へ持込とめるのだ其家の内の内儀い女よ似合ぬ大ッ腹で面せへ美りやア親元の怪しい者でも擰いすよ前借を貸抱へるから成丈直をよくとめる氣だ(熊)小田原の相撲屋といい己の方よも當りが有が若其家の内よ東京から稼ぎよ來て居る女郎い無か(三)外と違つて彼家の内い東京者が七分だから只東京と計りでいどれが足下の探す女か知ねへ程よ玉揃ひだ(熊)然言内あら己も行て何ぞ樣子か見度物だ(三)幸ひ今の一件物を其家へ賣込よ仕た所が己獨ヒやア親判よ成人が無つて不都合だ兄の積りよ僞欺して一所よ往ちやア呉めへか(熊)何せ此方も東京から割を貰ひに來るからい親判位へい易い事己で宜りやア往ッて遣ふ(三)そいつア何より有難ヘトキコ判を持ちやア居めへの(熊)察しの通り判杯い有所勝負の間よ合せだト三五郎上手の戸棚より三文判を大分出して(三)どれでも宜のを持て行ねへ(熊)能々道がい足下の内だ三文判の貯へが澤山有とい感心だト判を撰取懷へ入る三五郎跡の判を戸棚へ仕舞(三)夫じやア己も支度を仕樣(熊)ソリヤア能が分前を幾等呉か極て置ふ(三)然サ只あら一割だが判迄押せる事だから張込で二割遣ふ(熊)イヤ二割とい餘り少ねへニッ山とも言度が入費を懸て居丈よ四分六ゐして負て置ふ(三)イヤ四分六じやア己が合ねへ夫じやアずッと張込で三割遣から手を拍ねへ(熊)然して幾等よ賣込積だ(三)先東京の吉原あら三本位の物い有が何を言ても宿場の事一本半の見積だ(熊)一本半と見積れバ三割貰て四十五圓まア其等で負て置ふ(三)ソリヤア然と肝心の玉がぐず〳〵仕ねへ樣よ能云聞せて置よやア成ぬト爰へ奥より以前のお角お夏よ化粧をさせ連て出て來り(角)得心して柔順く奇麗よ化裝が出來升た(熊)イヤ素的滅法奇麗〳〵是つア三本が物いある(三)エヘン〳〵ト紛らす仕打(熊)何サ曾しの三本も立派よ差せて遣度物だ(三)熊さん足下も知ての通り彼家の内の主人位へ慈悲深へ人いねへから奉公人い仕合だ(熊)然とも〳〵大仕合だ此子あんぞが行た日よ

やア娘の樣ゑ可愛がり勤め抔をさせるより寧そ内の養女ゑするとわの内儀が言かも知ぬ(角)身を捨て祢浮無瀬と然成時ハお夏さんも大仕合でムんせう(夏)ほんゑ此方の内儀さんゑもいかいお世話ゑ成升た何れお禮ハ私しが内へ戻つた其上で急度致すでムり升ム(三)ィヤ内へ戻ると言事を向ふの主人へ聞せると氣まづくするから居る内ハ一生涯も居る積りで氣ゑ入樣ゑ仕ゑやア成ねへ(熊)夫故お前ハ身元を隱し此熊藏の妹だと向ふの主人へ言ふが能(夏)ェ、夫おらわのお前さんのト恟り仕打(三)ハテ夫が主人の氣ゑ入御授だ(夏)ハ、、アト思ハず泣出すをお角此体を見て(角)テモ可哀さふお(熊三)ヤア(角)ィエ可愛がられて奉公中ハ樂をするのが其身の德(熊)夫が世ゑいふ長へ者ゑハ惡れろだト爰へ橋懸りより幕明の駕舁き(八、十)出て來り(八)モウ日暮方でムへ升から(十)時刻を計つて參り升た(三)オ、調度能所だ直ゑ此子を遣て呉ねへ(八、十)こいつア愈々鑑定通りだ(三)ナニ鑑定通だとハ(八)ィエ大方出懸の時分だと(十)鑑定を付て參りました(熊)サア〳〵早く駕へ乘ねへトお夏を急立る(夏)ア

モ心細いことじやおアト此内駕舁二人門口の山駕を内へ入るお夏憂ひの仕打ゑて駕へ乘事宜しくお角ハ奥より鎌と火打石を持て出て(角)體を清めて上るぞへトお夏へ切火を打掛る(三)平素ゑ似合ず宜氣が付た(熊)道がハ姉ぢだサア駕を遣ねへト駕舁両人駕を舁上る此摸樣馬士唄時の鏑ゑて道具廻る

本舞臺一面の平舞臺正面跡へ下て千本格子女郎屋の前面上の方九尺の入口柱へ貸座敷の札を掛相摸屋と記せし長暖簾を懸日覆より瓦庇二階家の張物を下し下の方板羽目塀の内より見越の松此前ゑ箱の用水桶ずッと上下同く板塀ゑて見切都て小田原宿女郎屋表懸りの体爰ゑ床几を二脚並べ上手ゑ蘆原丹作、名和鳥藏羽折袴帽子を冠り靴を穿探索方の拵へ腰を掛居る下手の床几ゑ若い者九介着流し下駄掛ゑて腰をかけ此見得宿場の騒ぎ唄ゑて道具留る(九介)東京からのお掛りをハ同道でお出ゑ成たい何ぞお調べでムり升るか(鳥藏)外じやア無が此方の内ゑ此間から流連をして遊んで居るものが有さうだが種ハ儲かゑ知て居るか(九)ィエ此節でハハ承知の通り書上の帳面が嚴

重でムり升からちやんと身元を書配して先日差出てムり升る夫ゑ相違ハムり升ント鳥藏懷中より手帳を出て見て(鳥)署へ書出して有のゑハ山梨縣の郡内で織元の商人船木賢三郎として有が十日も流して居るといひ年齢から衣類の樣子が東京からの調べ物ゑ何か似寄て居る樣子だ然して金の遣ッ振ハ如何だ(九)ヘィ商人でハムり升が何でも弗や米相場へ手を出すお人と見え升て金遣ひが奇麗でムり升(丹作)金遣ひが粗けれバ愈々夫ゑ違ひハ無が然して何ぞ咄しの内ゑ東京からでも來たと言話しでも仕やア仕ねへか(九)ィエ東京から來たといふ咄ハ別ゑ致し升んが藝妓を上て騒ぐ時よく東京の芝居の話を仕おさる樣子でムり升(丹)シテ其客へ出て居るのハ何といふ娼妓だか夫を聞せて置て呉(九)此方の内の一枚看板お千代さんといふお職でムり升(丹)初買で出たのか以前からの馴染とでも云譯か(九)何でも以前ハ知合た中でハムり升たか初買の晩から大もてゝ外の客へハ出おい抔と其お千代さんも大浮れで勤め放れた待遇が屏風の内で有樣子彼手取者ゑ懸つてハ誰でも大概吸取れ升(鳥)お千代と言のハ此宿で一二を爭ふ客取だが儲か產れハ東京だお(九)東京の下谷邊の元藝者だとア事ト此内丹作ハ手帳を出て鉛筆ゑて宜しく書留(丹)夫で荒增當りが付た二階ゑ居るおらそッくりして僕等が調べゑ來た事ハ本人始め相方ゑも知さぬ樣ゑして呉ろ(九)ィエ其お客ハ夕方から海水の湯へ這入て來とお部屋の女を連升て海邊の温泉へ行升た(鳥)何か此方へ歸れバ宜が逃られた日ゑハ不都合だ(九)ィエ海水の温泉同樣首ッ丈の熱い〳〵歸るゑ違ひハムりませんト此時騒唄キッパりと成上手より二幕目の船頭三八旅形腹掛股引草履ゑて竹の子笠を持出て來り花道の方へ行懸るを丹作見て(丹)オイ〳〵其處へ行のハ三八じやア無かト是ゑて三八振返り見て(三)誰殿かと思ひ升たら蘆原さんでムり升たか變つた所で遇升たハ用筋で當地の方へ出張でムり升たか(丹)東京からの調べ物で當地の方へ出て來たが足下ハ何處へ往たのだ(三)道了樣から山越ゑ湯場へ廻つて來升たが長く湯治も出來ませんから塔の澤へ連を殘し山から下つて參り升た(丹)トキニ丁度能所だ足下ゑ日外聞て置た强盜の一件で實ハ當地へ出て來たが

見知人が欲い所一晩位ゐの旅籠銭い僕が持から一所ゑ行目利をしてい呉まいか(三)然して何處迄ゆ一所ゑ參り升のでムり升(鳥)直此御邊の温泉まで一所ゑ往て貰ひたい(三)是から直ゑ酒匂を越乗台馬車で大磯まで延升す積りでムり升が旅籠を奢つて下さるなら何方へでも往升うト此内九介向ふを見て(九)イエ温泉迄お出無ともアレ〳〵向ふへ其お客が湯から歸つて參り升た(鳥)夫い丁度幸ひだ暖簾の内ゑ隠れて居て見て貰ふのが早手廻しだ(丹)夫あら三人ゆ苦勞あがら(三)ドレ見知人ゑ成て上ませうト九介先ゑ鳥藏、丹作、三人付て暖簾の内へ這入跡宿場の流行唄ゑ成向ふより二幕目の賢三郎若流し白縮緬の兵兒帯下駄掛ゑて出る跡より下女おとめ若流し前垂懸ゑて浴衣を抱へ濡た手拭を持付添出て來り花道ゑて(賢三郎)開けた世とい言乍ら小田原の宿の緑日へ植木屋あどが出て居るとい東京優りで感心だ(お留)觀音様の傍緑日い此宿でも夜見世が出て毎月賑かでムい升から古着市あどが立升て宜商ひを致し升(賢)イヤ觀音の緑日ゑ古着市い感心しねへ(留)ソリヤまたあせでムり升(賢)上這あぞい異平だ

(留)アレ旦那傍笑談斗かりト右の唄ゑて舞臺へ來る暖簾口より以前の(九介)出て、旦那お歸り成いましお湯い如何でムり升た(賢)這がい箱根の湯治場や熱海へ近い土地丈有て湯の立派ゑい驚いた(留)お千代さんが内の風呂へ旦那と入浴をお樂みゑ成つてお在でムり升のを態〳〵外へお出ゑ成とい少と傍邪見かと思われ升(賢)イヤ女抔と一所ゑ入浴と氣が詰つて行ねへものだ(留)イエ旦那と傍一所でいお千代さんの其外い女の方で氣が詰り升(九)ハテあソリヤアあせだ(留)居敷が大きふムり升から極りが悪ふムり升(九介)こいつア成程女の地金だト爰へ上手の暖簾口より以前の三人出て態と賢三郎の傍へ來て(三)思ひ掛ない旦那様其節い有難ふムり升た(賢)ヤ和郎い〇ト恟りして氣を替て終ゑ見た事のない知ぬ人だが何の禮を言成るのだ(三)お忘れかい知升んが日外東京の三圍堤で渡し場から向ふへお越し被成時一圓札をお貰ヤした船頭でムり升(賢)是〳〵ソリヤア何を言のだ私やア其様あ法外の渡し錢抔を和郎ゑ遣た覚えい毛頭ムらぬから夫い大方人間違ひ和郎の思ひ違ひで有ふ(三)イエ夜目故大方旦

那の方でいお見違へかい知升んが私しの方ゑい確乎と見覚えがムり升(賢)何處ゑ覚えが有かい知ぬが廣い世界ゑ似た者い幾等も有から氣の狭い思ひ違ひいせぬ物だ(三)此方ゑ覚えが有升ても旦那の方で思ひ違ひとお言被成ば夫迄だ(留)是が旦那ゑお貸でも有と言譯でいあし貰いぬ物を貰つたとア升あら夫ゑしてお早く二階へ入ッしやい升(賢)遣ぬ物を遣た顔で能氣ゑ成て居る時い若本人が出た時ゑ腹を見られて恥入から正直ゑして置ねば成ぬ(九)ヤア兎も角も二階へお出被成升(賢)暖簾の内から出被成たい此方の内で知た人か(九介)イエ左様でいムいません(九)夫あら知ぬ船頭殿能又跡で考へあさい(三)どう考へてもお前さんゑ(賢)まだ其様あ事を言て居るか(九介)サアお出あさい升ト九介先ゑ賢三郎お留上手暖簾の内へ這入引違へて以前の鳥藏、丹作、出て來る(三)モシ遊原さん彼ゑ違ひいムりません(丹)幾等向ふで隠しても其職掌の目から見れば白い黒いい直ゑ分る(鳥)いよ〳〵彼と極つたからい直ゑ是から手當をして今夜の内ゑ召捕升う(三)是で傍用が濟升たら只今ヤした急ぎの道お別れヤと致し

升う(丹)夫じやア爰で手間取せた代りゑ馬車を急せるから馬車會社まで一所ゑ行ッし(三)夫い何より有難い(鳥)僕い是から署へ往て召捕手筈をせねば成ぬ(丹)夫あら道まで傍一所ゑ(鳥)三人とやら早く來さッし(三)ドレお供を致し升うト流行唄ゑ成三人向ふへ這入暖簾口より九介出て(九介)サア〳〵一ッの心配が出來た何様客でも此節い十錢宛の割花が通り相場の祝儀だが五十錢宛呉たのい織屋の主人ゑ似合ねへ器用あ金の遣ひッぷりと思つて居たが案の定東京からの追込者こいつア今夜捕つたら貰つた祝儀い禮の言損吐出す事ゑ成かも知ねへト此もやう騒ぎ唄ゑて道具廻る

本舞臺三間の間跡へ下て置舞臺程の二重を敷詰此前を廊下の心正面上の方一間中仕切の有戸柳上い二枚の銭戸下いとめ込の簞笥四引出是ゑ續ひて眞中四尺の延氣柳金具一式燈明を大分ゑ照し此下二枚引の襖下の方板羽目是へ女郎の玉數を記せし名前の張出し裾通りゑ拡冠の酒樽前ゑ呑口受の桶わり此脇ゑ帳場格子後ゑ玉帳其外帳面を釣しずッと上手廊下の片遠見同く下の方淵心ゑ跡尻の

心よて一段高く襖の裏を見せ都て相摸屋部屋の体二重能所よ大ぶりの行燈を灯し桐の大火鉢の脇よ二階廻しのお繁好の髭若流しよて住居下手よ以前のお留住居此見得矢張宿場の流行唄よて道具留る(留)お繁さん何ぞ用でムんすか(お繁)お前を呼だゝ外じやァ無がわのお千代さんが出て居るお客ゝ甲州郡内で物持の織屋さんだと言て居るが泥坊かも知ぬいよ(留)アレお繁どん氣味の悪いッリヤアマァあせでムんすへ(お繁)わのお客よゝ知されぬいが今方茲へ此宿の探索掛の鳥藏さんと東京から來た探索方が調べよお出で遣ひ方の樣子を聞て歸つたがお内儀さんがお留守故私が万事を聞込で若アノお客が泥坊だと大騒ぎが始まるからお前沙若勞だがお内儀さんを迎よ往て來てお呉(留)道理で今方遲入口で見懸た二人ゝお役向のお方の樣だと思ひ升た夫でゝ早速内儀さんを迎よ往て呼で來升う(繁)然して今夜も彼お客ゝ歸る樣子ゝ無つたかへ(留)何して〳〵歸ると言てもお千代さんが放し升ん拵聖天樣の炎凝で放れッ子ゝ有升ん(繁)聖天樣だと思ふ内不動樣の金縛りよ引縛られて行ふも知ぬ(留)ドレ私しゝ觀音樣へお迎よ行て來やうトお留ゝ橋懸りへ遣入引違へて橋懸りより以前の九介先よ(三五郎、熊藏)お夏を連て出て來り(九)モウ程あく内儀さんがお歸り被成で有ふ拵一服呑で待て居あさい(三五郎)夫でゝお歸りを待ませふ○お繁とんお留守番かね(繁)三五郎さん此間ゝ久しく内へお見えでおかつた(三)東京から歸つて來てから引續ひて貧的よ終當家へも沙無汰を仕升たオイ熊さん其子を連て此方へ上り一服やつて待あさい(熊)左樣あらぢ免下さい○ト恥しがるお夏を連て二重へ上り下手へ住ね、コレ〳〵妹爰よお出被成お二人さんよも今夜からお世話よ成ぬ拵お近付よ成がいゝ(夏)ハイト差俯向て泣て居る(九)モシ三五郎さん此子ゝへ(三)昨日仲間の源六から當家の内の内儀さんへお話しヤして置升た是が東京から參り升た奉公人でムり升(九)源六さんから咄しの有た夫あら是が目見得の子か(熊)サァ〳〵妹爰へ出てお二人さんへ何分共よお頼みヤすとお願ヤせ(夏)ハイト矢張默つて泣て居る(繁)オヤ〳〵夫でゝお前さんの妹ッ子でムり升か失禮乍ら兄さんよゝ少も似ぬい良子だねへ(九)オイ〳〵お繁どん程の悪い少しも似ぬいで良子だとゝお前ゝ悪いと言ぬ割り其樣あすッぱぬきゝ言ねへものだ(繁)オヤマァ私しとした事が兄さん堪忍して下さい(三)イエ悪いから悪いといふのゝ嘘で固めた家業拵の是が樂屋の正直だ(熊)エ、足下まで悪い大皷だト此時騒ぎ唄きッパりと成り上手の廊下の口より娼妓お千代好みの島田髷仕掛形よて上草履よて出て來り上手よ立て居あがら(お千代)お繁どん内儀さんわへ(繁)觀音菩の沙綿日へ先刻お出でムり升が何ぞ沙用でムい升か(千)少とお咄しヤ度事が有つてト宜しく仕打熊藏お千代を能々見て(熊)オ、違へねへ爰よ居たかト此聲を聞きお千代思ゝす熊藏を見て(千)ヤお前ゝ○ト恟りして氣を替へ、お歸りあらゞ知せてお呉れト言捨てッイと上手へ遣入熊藏能所で逢たといふ思入よて(熊)今爰へ來た女郎衆ゝ何と言ふ名でムへ升へ(繁)お千代さんと言升て東京から來た流行ッ子能賣るので玉高でゝ續く者ゝ有升ん ト熊藏後の張出しを見て(熊)成程一番筆頭で三東近くの玉を賣とゝイヤ大層お流行方だト宜敬思入三五郎是へ目を付る(九)何よしろ内儀さんゝ最お歸りよ成さうあるのだ(繁)今お留どんをお迎よ遣たから程あく歸つてお出で有ふほんよ内儀さんが居あいと思つてお客も取ずよ寄部屋で馬鹿ッ騒ぎをして居る樣子憎まれ口を利て來るから三五郎さんぢ免被成トお繁ゝ草履を穿上手へ遣入(九)ドレ此方も見世へ行ふト橋懸りへ遣入跡よ三五郎思入有て(三)オイ熊さん足下の先刻尋ねたのゝ今爰へ來た女だらふ(熊)察しの通り爰へ來た今の女郎ゝ東京の數寄屋町で新常盤屋の小松と言た藝者上りわの女よやァ已も少と因縁の有色男だ(三)是サ能加減よ垂ねへか二階廻しが聞たあら又すッぱぬきを言ふだらふ(熊)イヤ是計りゝ虚ヒやァ無今よ二階へ押上り已の貫目を見せる拵其時恟りしあさんあ(三)其樣あ事より爰よ居る妹の判が肝心だ(夏)何卒ぞお慈悲でムい升から妹の積よ成事ゝお免し被成て下さい升(熊)何で其樣よ否がるか爰のお職のアノ女郎と因縁の有熊藏の妹よ成ヤァ仕合だ(夏)イエ〳〵何卒夫計りゝ(三)エ、内で得心して來乍ら否應言と聞ねへぞト急度いふ(夏)ハァ、ト泣伏す(熊)まァ兎も角もアノ小松よト立懸るを止て(三)是サそんあ

よOト下よ居させるを道具替りの知せ、急おさんあト此もやう宜敷騒ぎ唄よて道具廻る

本舞臺一面の平舞臺正面上手一間の床の間續いて地袋違ひ棚下の方彩色畫の扇の地紙を散したる張壁上の方畫心よ九尺の連枝窓下の方折廻し塗骨の障子を建切ずッと下手一面の板羽目爰よ蒲鉾形の掛行燈都て相摸屋二階奥坐敷の体上の方よ扉風を建廻し此内よ夜具布團宜敷能所よ燭臺を灯し獅噛火鉢の脇よ以前の賢三郎座布團を敷住居此傍よお千代住居前よ臺の物酒肴を並べ下の方よ藝者お汐三味線を前へ置お磯、お浪両人とも揚女郎よて住居此見得さわぎ唄よて道具留る(お磯)何だか今夜いお座敷が陰氣よ成て居升から(お浪)外の座敷よ負あい樣よ陽氣よ騒がふじやムんせぬか(お汐)角力甚句や活惚も餘まり古ふムい升から何ぞ旦那とお千代さんよ敬へてお貰ひア乍ら粋お端唄でも彈升う(賢)さう又下駄を預けられちやア端唄の一ッも遣所だが渇から上つて一杯遣り眠氣がさして成ぬから一寐入遣てから後よ陽氣よ騒ぐと仕樣(千)私しも今夜い宵ッから痛頭がして成おいから一旦爰を引よして後よ皆あで遊ぶと仕やう(磯)夫でいお酒やお肴い此儘そッくりして置て後よ上ると仕被成せ(浪)はんよあんあよ惡騒ぎよ一ッ二階で騒がれてい頭痛持よい難儀でムんす(汐)丁度其内浪繰日へお參りをして來升からお目が覚たらお千代さんお呼被成て下さい升(千)後よ呼から然してお呉(賢)扨い繰日を假托て良人よ逢よ行のか(汐)アレ旦那良人杯い有升んよ(磯)イエお汐さんの良人い蛸よ似居る臺屋の息子の新助さんで有升よ(汐)誰があんあひよッとてよ摺ふ者が有升物か(浪)夫でもあの新助さんの鹽辛聲が粋だと言て此間譽た癖よ(千)小田原丈よ鹽辛聲よ思ひ付たのでムんせう(汐)お千代さん迄同じ樣よたんとおいぢめ被成升(賢)鹽辛聲あら蛸よ似ねへで烏賊よ似て居さうお物だ(汐)アレ旦那迄一所よ成て(磯)いぢめられても嬉しさふよ(浪)莞爾笑つて居る癖よ(汐)ドレ〳〵早く逃升うOト四邊を片付三味線を持、お千代さんお大事よ被成旦那後程參り升よト騒ぎ唄よて三人下手の障子の内へ遣入る跡見送つて賢三郎思入有て(賢)眠くも無よ宵ッから眠いと言て彼奴等を下へ遣たい他じやアねへ最

浮々と此二階よ流連してい居れねへ(千)私もお前の戀いで居るのい譯有事だと察したから同じ樣よ頭痛がすると皆あを下へ遣たのだが浮々として居れ無とい何言譯で有升へト是より變つた合方よ成(賢)此間から流連し二階よ計り斯して居るのい體の爲よ惡からふとお留を連て海水の風呂へ這入て戻つた時此方の内の見世の前で氣障あ奴よ出逢たから最浮々と仕ちやア居れぬ(千)能似事も有物で私も今方下へ行思いず出合た氣障あ奴夫故賢い戀いで居が然してお前が氣障あ奴よ見世の前で出合たとい何者でムんすへ(賢)兼てお前よ話した通り己が小梅で仕事をして遅手の懸るを逃れ樣と心急しく別仕立の渡し船へ乗込だが生憎其の晩船賃の錢も小札も持合とさず一圓札を船頭よ氣張て遣たが身の錆で其渡し場の船頭よ見世の前で出會し知らねへ面で別れたが樣子を聞て居たと見え暖簾の蔭から出た二人い顔を見知つた探索掛り的切下の部屋へ來て己の身元や遣方を調べて行たよ逢へいねへ(千)夫あらお前もアノ晩よ渡を越て遣たる其船頭よお出合か私しも丁度アノ晩よ文三が川へ飛込だを跡よ見捨て逃る時惡い尻尾を押へられた熊藏と云ごろん坊よ今方下で出合たが起りもしあい空癖が差込ふりで藤澤で私よ蒔れて悔しがり居所を探して此内へ文句を言よ出て來たと心付てい今の内何か彼奴を言くるめる工風を付て追返し巣替を仕樣と思ふのだが然してお前い爰を逃何處へ高飛する氣だか落付先を言てお聞せ(賢)廿里隔つた小田原迄早くもヅキが廻つちやア街道筋い夫から夫もう手が廻つて居樣拵是から相摸の山越よ閑道傳ひで甲州の笹子峠の下へ出て安泊をして居ると聞髭の七兵衛と云者い福松と云た仕事仲間夫を便つて餘熱が消る間い山の中よ當分隠れて居る積りだ(千)成程お前の言通街道筋を行時いヅキが廻つて危あもの閑道傳ひよ山を越高飛するの外い無然云事あら足弱でもお前よ苦勢い懸あいから私しも連て逃てお呉あ(賢)連て逃るい易い事だが前借の有流行ッ子を此儘拠ッて逃るのい爰の内へ氣の毒だ(千)其氣遣ひの無樣よ地前同樣前借も住込時よ輕くして爰へ來てから主人方へ儲けさせて遣て有からお部屋よ損い有やアしあい(賢)然言譯あら今の内髪でも結んで置がいゝ(千)お前と寐るの

で根が拔て毀れた積りで結んで置ふ(賢)拔ると言ハ山越ゑ馴た夜旅の間道も(千)女夫ゑ差た簪の足拵山を横ゑ見て(賢)下る難所の阪道ハがッくり島田のつゞら折(千)夫も解いて搖上る箱根の山の玉櫛笥(賢)結ぶ清水も谷川へ(千)落ゆく流れを便宜とおし(賢)富士の根方を廻りおハ(千)甲州道の下街道(賢)茂る笹子へ身を隱し(千)互ゑ苦勞をして見樣か(賢)夫じやァ早く支度をしろ(千)お前も其氣で待てお在トお千代立上り下手へ行此時橋懸りより以前の熊藏出て來りお千代ゑ行合お千代顏を背けて行ふとするを熊藏急度捕へ(熊)己逃樣とて逃す物か己と下迄うしやァがれトお千代是を振拂ひ(千)逃隱れでも仕アしまいしイケ騷々しい靜ゑおし何の用で下へ來たのか私しやァ今夜ハお客が有からお前ゑ出ちやァ上られおい(熊)イヤ已の樣お恩知ずを態々買ゑ來やァしねへ文句が有て出て來のだ一所ゑ下へうしやァがれ(千)一所ゑ下迄行おいでも私しの出て居る座敷へ來て何の用だか言が能お前ゑ文句を言れる樣お此方ゑ覺えハ無筈だ(熊)何處の座敷か楽内しろ(千)お客が居から靜ゑおしトこちらへ歸つて

下ゑ居る此内賢三郎ハ思入有て上手の屏風の蔭へ這入熊藏宜しく住居誂への合方ゑ成(熊)夫じやァ爰で打明ても攝ハ無と言のだお(千)何をお前が言出かわだかまりの無私だから誰が聞ふと攝やァしおい(熊)攝ハおけりやァ言て聞すが能も己を藤澤で癪の起つた振をして疾から時氣で居と見えわりやァ其儘逃やァがつたお(千)ソリヤァ言おいでも知た事お前の樣お様でおしゑこびり付て歩行てハ私のうだつが揚らおいから体能言て時たのハ厄介拂ひをした積りサ(熊)然又手前が色氣なしゑ愛想盡しを言アがりやァ己が方でも愚痴らしく氣障お文句ハ言ねへから手前の惡事の口塞げゑたんまりとした禮をしろ夫で器用ゑ別れて遣ふ(千)オイ〳〵熊さん寐惚おさんお私の惡事の口塞ゑ禮をしろとお言だがお前の方からアノ晩ゑ釣を出しても能程お禮ハ充分して有筈ゑだ其上ゑ跡ねだりを仕樣抔とハ虫が能お前も餘程押が強い(熊)押が強いか知ねへが惡い尻尾を押へられ其口塞ゑ一晩でも抱寐をさせりやァ己の持物言ハ手前の惡足ゑ千歳座でした死神同樣何處がどこ迄付纏ひ野郎を川へ飛込せ指を差て笑つた樣ゑ其方が深水へとまる迄ハ小遣錢でもいたぶつて取のが此方の持前だ夫が夏蠅思ふおら纏めた金をあの晩ゑ口塞げゑ出しすッぱりと手切話しゑ爲が能然も無内ハ己の女何奴の判で此内の抱へゑ成て居のだか夫から先へ言て仕舞へ(千)オヤヤァ大層良人ぶつて臆面もおく明るい所で其樣聲色が遣へた物だ繩を鳴して窓下を流して歩行聲色でも月夜の晩ゑハ手拭で顏を隱して居る樣子私しも隨分東京で代り目毎ゑ芝居ハ見たがまだ松助の聲色でそんお蠻詞ハ聞おんだ(熊)ヱヽ大概ゑしやァがれ女郎ゑ成て不貞腐れ抱寐をされた此己を突出し者ゑ仕やァがやりァ汝の惡事を言立て鎖繋ぎの土器色赤い仕着を着て遣から樂みゑして待て居ろ(千)盜み泥棒でも仕やァしめへし人聞の惡い事を言おさんお惡事〳〵と大行ゑ凄みお事をお言だが私しやァ仙で土を擔ぐ其樣科ハ仕やァしおい(熊)ナニ仕ねへ事が有物か應來藝者で商人の鼻毛の延た客を引攝腹さん〳〵吸取てモウ取金の無所から心中仕樣と欺くらかし三圍堤へ連出して文三を川へ突落し舌出三番の烏飛羽根を伸した人殺ハ舌の劔の劔烏帽子惡事の數も鈴成

よ振バ振程音が出るからぢたんだ踏して遣よやァ成ねへ(千)口上茶番を見様ゐ其様誰しも聞倦た併し私も默つて居るとゐ前の様ゐ愚物ゝ自分の體へ火の付とも知ずよ頓馬を働くから其譯道を聞せて上やう(熊)己が體へ火が付とゝ可笑ゐ事を言ァがる何で頓馬を働く物か(千)頓馬で無りやァ何で又あの映の事を言立よ自分の科を知ゐいのだ(熊)其方の惡事を言立るよ已よ科が有物か(千)ソリヤァ彼時私よ搏ゝずゐ前が直よ訴へたら其方よ科ゝ有まいが自由よ成て呉たゐら口を拭て默つて居様と私よ迫つて安泊りで抱寐をすれバ惡事の同類(熊)ヤアトギッくり思入(千)まだ毒碌をする程の年でも無が熊藏さんゐ前ゝ蛙の頬冠で向ふの見ゐい人だねへ○。是より合方キッぱりと成、應來藝者の嚴ましい風の吹夜を横道よ曖昧茶屋の逢引ゝ男も女も罰金の律ゝ元より覺悟の前夫も此方ゝ勤めの身轉で只ゝ起ぬといふ目當を付て金滿の客を引掛け三味線の枕も低い忍び駒訝ゐ音〳〵で浮氣よさせ鼻毛を算で算段の出來る程丈吸瑕のゝ三の糸より細腕でもよりの懸つた娼法づく揚句の果が義理詰で死で呉ろと賴れ、バ否とも言れず心中と出懸た場所も向島雪見よ轉ぶ所まで と故跡よ殘る石碑の長命寺をも知乍ら死と云のも馬鹿らしく相手を先へ飛込せ大事ゐ命を捨ゐいのゝ世間で能言自由の權そこへ付込横合から氣障よからんだ無心物一晩位ゐ貸た迚跡の減ゐい代呂物と死だ積りで抱寐をさせ口を塞げバわの時の惡事ゝ同じ刑條持相手よ寄バ一晩で五十圓取腕前で二の膳までを振舞バ禮ゝ餘つて歸るから小遣錢でも持て居ゐら其方で遣て行がいゝト宜敷仕打熊藏呆れし思入よて(熊)ィヤ何言バ斯言と惡垂女の本音を吹素的ゐ詫を吐やァがりやァ己も色氣と欲を捨是拵下で懸合込元の主人の常磐屋へ索引て行から覺悟しろ(千)連て行ゐら行が能數寄屋町の新常磐屋よ抱よ成て居た時分鼻毛の延た宿碌が口說を幸ひ前借を踏氣で自由よ爲た拵旅から旅を喰飽たら此方で無心よ行積サ(熊)夫ゐら彼家の抱へ主よも一目押せて置やァがつたか(千)藝者よ成前夫から夫旅を遊んで歩行ても錢よ困れバ旅人の女よ懸つて癒さうゐ相手を見立て連よ成枕搜しや胡麻の蠅小盜みもすり掠奪りとさんざ惡さを仕拔て來た吾身よ向つてゐ

前達が凄みゐ文句ゝ無駄事高が惡事の提灯持小田原丈よ相談ゝ纏まる筈ゝ有やァしゐい(熊)エ、仕様のねへ女兒だまだ此外よ聞込だ惡事の種ゝ屏風の内今よ泣面かわかせる仕様が有から待て居ろト立上つて下手へ行懸る此時上手の屏風の蔭より賢三郎出て(賢)オイ熊さんとやら一寸待ねへト前へ出て住ふ熊藏元の所へ住ひ(熊)旦那眞平ぱ免ゐせへゐ聞の通り不貞腐れの惡垂女の言艸よゐ客の居のを知乍ら終聲高よ成升た(賢)私もうと〳〵寐て居から委い事ゝ知無が夫じやァゐ前ゝ東京から能々尋ねてムつたのか(熊)ヘイ東京の淺草邊をごろ付て歩行升月の輪の熊と言遊人でムへ升(千)與山の花屋敷で能見世物よ買ゐんだ(熊)エ、人を馬鹿よ仕やァがるゐト賢三郎紙よ包し札を出し(賢)今言通り夢幻で委い譯ゝ知ゐいが旅費を遣つて東京から能々尋ねて來た者を此儘歸すも氣の毒だ私もゐ千代の客よ成爰よ居たのが身の不肖車の錢を上様から莞爾笑つて歸んゐせへ(熊)車の錢を下さるとゝ夫やァ有難ふムい升(賢)ゐ千代是を遣て呉ト札を出す(千)飛だぱ散財を懸升てゐ氣の毒で成升ん○是を持て早く歸んゐト投て遣る熊藏開き見て(熊)旦那コリヤァ五圓ムり升ね(賢)五圓有たら東京迄通し車で行れるだらふ(熊)仰しやる通り五圓有バ一杯呑で歸られ升が夫よ付てゐ前さんのゐ名前が聞度物だ(千)遊びの場所で野暮らしい名前ゝ何でも宜じやァゐいか(賢)否々名前が聞度バ何も隱すよ及バぬ事だ私やァ船木賢三郎と言甲州郡内の織屋の主人だ(熊)此間から十日程流連をしてゐ在被成客と言のゝゐ前さんか(賢)何で夫を尋ね被成か商法上の都合よ依長逗留をして居のだ(熊)夫じやァ五圓の車賃ゝ其方へゐ返し升ト投返す(千)何が不足で返すのか入ゐい札成一圓でも誰が無理よ遣物か(熊)是が眞面ゐ客ゐらバ假令五圓が一圓でも禮を言て貰ゝて行が向ふ越の船賃よ一圓遣たと言旦那(賢)ヤアトぎッくり思入(熊)然も其晩小梅の土橋で人も知たる金滿家淺草東仲町の渥美己之右衛門と言金貸が抵當よ取た寮が賣五百圓と云金圓を請取歸る途中よ待て手疵を負せて威しかけ金をそッくり卷上た賊が有たと云事ゝさつき此家へ來道で三人と言船頭よ出合て咄ゐ聞て來た此相撲屋よ十日程流連をして居客が一圓と云船

賃を呉た旦那よ逃へねへと私よ敢て行升たが何と大きな仕事をする賊も有じやァムへ升んか(賢)夫じやァ已が船頭のら聞た賊だと言のだな(熊)途中で今方聞た咄しを證據よ賊だと言升のも捕めへ所のねへ譯で偖かよ夫とい言れねへが枕さがしや胡麻の蠅小盗みゆすり掠奪り悪い事あら仕放たと言悪垂者の此小松を相方よして流連し悪婆の本音を聞乍ら愛想の盡た様子もねへ切放れの能扱ひい堅氣な者よい出來ねへ事旦那も唯の鼠でねへと早くも覺つた熊藏の白眼た眼よ忘たちいねへ渡しを越た船賃よ一回逃た相場じやァ東京迄の車賃よ五圓い餘まり相場逃へだ(千)オイ熊さん何を言のだ貧乏と言ゞ抱らふと旦那のお慈悲で車賃を惠んで遣と仰しやれゞ甘い詞よ付上り弱求事よも品を替をつよ蔓んだ言悪り大事なお客よ難癖を付ると知ていい旦那より私が了簡成ないから一所よ下へ行がいゝ(熊)是サ其様よ白張惜るな旦那もお前も知めへが下い疾くよ手が廻り探索掛が部屋へ來て調べを付て往たとやら聞て二階へ上つたい已も一番金の蔓五圓の金を十倍増五十圓よもして呉たら下の奴等を胡麻かして爰を逃して遣氣だが然もね〳〵時い已が先立爰の二階い逃さねへから其氣で覺悟を爲て置け(千)覺えもないよ何で又其様な馬鹿氣た大金を旦那がお前よ遣れる物か(熊)夫じやァ旦那下へ往て饒舌立ても能らふか(賢)ムヽト思入(千)實よ旦那も氣の弱い心配するよい及び升んト爰へ橋懸りより以前の三五郎出て來り熊藏を見て(三)オヽ熊さん其處よ居か一寸顔を貸て呉ねへ(熊)オイ〳〵何ぞ急な用かト下手へ來る(三)今内儀さんが歸つて來て直よ咄しが極たから一寸下へ來て呉ねへ(熊)然して幾等と相場が極つた(三)年い五年で前借い百五十圓と相場が極つた(熊)そいつァ上直よ極つたが今此方よも相談が有て極を付て居る所た少時の間待て呉ねへ(三)何な相談か知ねへがお前も三割わりが取四十五圓よ成事だ善い急げだ一所よ行ねへ(熊)ソリヤァ已も承知だが別よ手間取譯じやァ無から少との間待てくれ(三)ム、極りでビリよ狂とつて愚圖〳〵されちやァ已が困る(熊)誰がビリヨ狂いる物か(三)夫な早く來て呉ねへ(熊)直よ行から待なと言よト兩人爭そひ居る此内賢三郎お千代よ呼やく事宜しくばた〳〵よ成

橋懸りより以前のお鶯出て(繁)モシ〳〵三五郎さん大變が出來升た(三)ナニ大變が出來たとい(繁)那子が手水よ往た切歸つて來ぬから變だと思ひ尋ねて見たら庭口の門が開て刎橋が内から下し有からい何でも逃たよ逃ひない(熊)何だ娘が逃出した(三)成程そいつァ大變だ是と言のも熊さんが二階へ上つて下ねへから探しよ來ので逃したのだ(熊)已を其様よ探さねへでも逃も隠れも仕ャァ仕ねへ(繁)其爭ひい跡よして早く往て探て下さい(三)逃した日よやァ玉なしだト三五郎先よお繁付て橋懸りへ逼入熊藏思入有て此方へ歸り(熊)大事な玉い逃しても已が見込だ賢三さん此方い滅多よ逃されねへが今の返事い何しなさる(賢)望みの通り五十圓器用よ出して遣ふから混雜紛れよ此二階を已が無難よ逃る様よ下拵へをして呉ろ(熊)金せへ貰やァ已も又其所い男の達引た娘を探すと胡麻かして裏手の口を開て置から其處から密々逃あせへト此内お千代屏風の蔭より札の包みを持て出て(千)夫でい是を遣升よ(賢)こいつを縁よ又其内巡り合たら禮を爲から夫じやァ手筈をして呉ねへト熊藏件の札を受取改ため見て(熊)已より上手な悪黨だけ切放れの能五十圓是で爰を逃られりやァ其方も仕合せ兩爲だト札を懐へ入る(千)熊さん都合が直つたら二階で遊んで行ないか(熊)お前の本音が分つちやァ此二階じやァ遊ばれねへ(賢)然して是から熊さんよい直よ東京へ歸る氣か(熊)逃た娘を探し出しモウ一儲やらかして湯治場へでも往て見やう(賢)夫な今の一條い味く趣向をして呉ねへ(熊)裏の出口を開て置から透を覗つて逃あせへ(千)あの子が逃た混雜が此方の爲よい能かも知ねへ(熊)其方の爲よい能らふが知ねへ日よやァ此方の損だ(賢)高が娘の足弱じやァ知ねへ事い有やアしめへ(熊)ドレ已も往て探して來やう(千)熊さん急度頼んだよ(熊)そこい已だ如才いねへわなト熊藏橋懸へ遣入跡見送つて(賢)お前と一所な逃様と約束したが斯成ちやァ今夜連ちやァ逃られねへ(千)落付先さへ知て居ゞ跡から逃て遣付から其氣で待て居てお呉(賢)落付先い今言た笹子峠の下よ居七兵衛と云安泊だ(千)夫い能が路用の金の先立所へ五十圓彼奴よ取れて悔いねへ(賢)何サ彼奴よ遣たのい少時の間預たのだ(千)夫じやァ直よ取返す氣

で(賢)娘を探さ出と聞バ裏から密そり脱出て彼奴の跡を付て行何所ぞで直さ殺す氣だト此時雨の音さ成お千代上手の窓より外を見て(千)オヤ殺と云口の下から雨が散々降て來(賢)彼奴を殺さ幸ひお丁度今夜の俄雨(千)道い大方灣だらふが忽滑ぬ樣さしてお呉(賢)ドレ熊藏の跡を付て裏から密り脱樣かト立上るお千代を是を止て(千)モシ夫じやア急度待てお在よ(賢)待て居ねへで何する物か(千)浮氣をすると○ト脊中を叩くを道具替りの知せ○聞やア仕あいよト此摸樣雨の音合方時の鐘さて道具廻る本舞臺一面の平舞臺向ふ酒匂川の河原の遠見裾通りへ蛇籠を並べ能所さ柳の立木上の方さ鎧葺の小家ずッと上下植込の張物さて見切所々さ腰を懸る程の捨石あり爰さ女郎買の仕出し口△⊕三人上手の小家の下へ退入雨舎をして居る此摸樣水の音雨車さて道具留る口女郎買さ往道で俄雨さ出會すといこいつい今夜い程が悪い△途中で降れて向ふへ行今夜女郎さ振れりやア三人共さ立目いあい⊕さう又頓間さ行時い傘を持て居あい代りさ潜でも脊負て歸るが落だ口丁度明日が授査日だから今夜い浮かり旅女郎の初會抔さい揚られぬへ△然かと言て馴染の見世へい借が有て揚られぬから寐そ女郎買い止さ仕やう⊕雨が止だら女郎買も止さして内へ歸るが爰迄來ちやア歸られぬへ口夫じやア矢張り小降の内濡る覺悟で宿へ行△どこぞ毛並の能さふお内を覗ッて初會で揚らふ⊕爰等がふりの客人で全身雨さ濡事師だ口鬼角言内小降さ成た△又大降の仕ねへ内さ⊕一ッ走さ遣つけ樣(三人)夫が能〳〵ト右の鳴物さて三人い向へ道入跡跡への合方さ成向ふより以前の(熊藏)白張の番傘をさし安下駄を穿出て來り花道さて(熊)娘を探しさ出たい能が思ひ懸ね(俄雨で傘と下駄を散財だ是で行術が知ねへ日さやア四十五圓さ成玉を棒さ振て仕舞のだがまだしも二階で賢三といふ味へ奴さ出合たので强求取た五十圓こいつが有やア東京から態〳〵出て來た甲斐も有先當分い湯治場で訝お遊びが出來ると言物マア兎も角も河原へ往て娘の行末を探して見やうト舞臺へ來る此時向ふ揚幕の内さて(賢)オヽイ熊さん一寸待ねへトバた〳〵さ成以前の賢三頼冠り尻端折既足さて追欠出て舞臺へ來る熊藏振返り見て(熊)己を呼のい誰だ〳〵(賢)熊さん己だ賢三郎だ(熊)オヽ賢三さんか裏口から首尾よく脱て來おすつたか(賢)お前が庭の門を開娘を尋ねさ出た跡を覗つて脱出し裏傳ひさ小橋迄來て隱れて居たが大層此方い手間取たお(熊)お前を逃して遣ふ斗かり出ずとも能さ庭口から態と裏手へ飛出したが降出す雨が止ねへから表へ廻つて下駄と傘を買て爰まで探しさ來たが呼懸たのい何ぞ用かへ(賢)お前を呼だい外じやアねへ今方遣た五十圓い少と此方さ入用だ悉皆返して貰ひてへト是より跳への合方さ成(熊)大方其樣事だらふが一旦遣た物を取返すのい子供でせへ返し泥坊さ成と言バ何ぼ强盜のお前でも大悪黨さも似合ねへこけ未練お事を言おさんお(賢)イヤ金計り取返し未練お奴と言れぬ爲命も傳手さ取のだから文句を言ずさ覺悟しろ(熊)夫じやア悪事を知れた故お前い己を殺す氣か(賢)ソリヤア言ずと知た事手前の樣おビックさ己の悪事を知れた迚五十圓といふ金を器用お渡す氣いねへがツキが廻つてあの二階で彼此するも面倒と逃る手筈の先馬さ使つて置て其金を悪皆此方へ取返す積りで預けて置たのだ(熊)道理で器用お出

し方だと己も不思議ゑ思つたが子供欺しを見様ゑ小刀細工い止ゑしろ手前の目からい熊藏を見下て居か知ねへが小皿博奕や淫賣の尻尾を押へてねだり込卑ゑ野郎のごろ付とい譯の違つた兄ィ様兇器を持て强盜を働く程の奴だから安直ゑ負て五百圓の一割税で五十圓上納させて遣たのを其運上が惜く成未練ゑ真似を仕やァがると己の命を取ねへ先手前の命が失ゑるから其氣で手向ひ仕やァがれ(賢)降出す雨ゑ水が増河原の巾が廣がる拇手前も大きゑ悪詑を吐爰で往生するも能が高の知たるごろ付が己の悪事の上前を取ふ抔といふざけた奴併し所も都路の蛙ゑくゑる小田原で口故其身を果すのも人間僅かの定命ゑ員數の合た五十圓濡手で泡と思つたのが榮華の夢の見納めゑ早瀬の水ゑ押流され魚の餌食ゑ成ふとも晒路た小石と一座をして死だ骨迄ごろ付とも勝手次第ゑ此河原で迷いず往生しやァがれ(熊)ツキが廻つて其首が細ッて居乍ら太く〳〵しく己の命を取ふとい盈の見ねへ獣物め取れる物ゑら取て見ろ(賢)網の魚でも鰐鮫が見込だ餌の小野郎め只一呑だ覚悟しろト懐ろより短刀を出て切て懸る熊藏是を

傘ゑて請止(熊)ェ、戯けた事を吐しやァがるゑト是より氷の音跳への合方ゑ成兩人傘と白刃の立廻り宜しく有てト〻熊藏肩先を切れ血紅ゑ成小石を取て打付乍ら逃ゑ懸るを賢三郎追詰て引戻し立廻り白刃ゑて熊藏の脇腹を刺る熊藏立身ゑて苦しみパッたり落入賢三郎白刃を拭ひ鞘へ納め四邊を見廻し思入有て(賢)見懸ゑ寄ねへ手强い奴大骨を折しやァがつた先刻の金を取返し氷葬禮ゑして遣ふか○ト熊藏の懐ろより以前の札を探り出し懐中して死骸を後ろの川へ打込是ゑて氷の音賢三郎流れの水ゑて手を洗ひ居る此時早さ合方パた〳〵ゑ成向ふより以前のゑ夏手拭を冠り跣足ゑて走り出て來り舞臺ゑて小石ゑ爪付パッたり轉ぶ賢三郎悔りして是を見遣(賢)そこへ來たのいゑ千代じやァ無か(夏)イエ左様でいムり升ぬ何れのゑ方か存じ升ぬが跡より追手の懸る者ゑ助け被成て下さり升トをど〳〵して跡を見返り居る賢三郎ゑ夏を能〳〵見て(賢)見りやァ年端の行ねへ娘跡より追手が懸るとい若や今方咄しの有た小田原の相撲屋から逃出したと言子じやァねへか(夏)エ、何して夫をゑ前様がト悔り仕打(賢)丁度二階ゑ居合せて噂ゑ聞て知て居るがそんゑら其子ゑ違へねへか(夏)何をゑ隠しヤ升う悪漢の爲ゑ東京から勾引されて參り升て今日小田原の相撲屋へ女郎ゑ賣れる悲しさゑ手水ゑ參る振をして裏の庭から逃ましたが何處へ行ゑも勝手い知ず裏道傳ひゑ漸〳〵と爰迄通れて參り升たが跡より追手が懸り升うから何卒ゑ慈悲ゑ私しをゑ助け被成て下さり升(賢)大方其様事だらふと己も二階で咄しを聞早くも夫と覺つたが然してゑ前い東京の何處の産れで何者の娘か夫を言ゑせへ(夏)ハイ私しい淺草の東仲町の産れゑて渥美己之右衛門とヤ者の娘で夏とヤ升する(賢)エ、夫ゑらゑ前い金滿家の渥美さんの娘だとか(夏)ハイ貴君いゑ存じで厶り升るか(賢)イエ内へ往た事いゑいがゑの近所での金持だと人の噂ゑ聞て居る(夏)然言ゑ方で厶り升ゑら何卒ゑ慈悲ゑ私しをゑ助け被成て下さり升内へ戻れパどの様ゑもゑ恩返い致し升るト是ゑて賢三郎思入有て(賢)爰で此子を助けれパ手疵を負せた罪亡し(夏)エ、何と仰やり升る(賢)イヤサ私い年中徳を積人の難儀を救ふのを樂みゑする位ゑだから身ゑ引受て助け

て遣る夫い安心するが能が然してお前の親父さんい壯健で内ゑ居あさるか(夏)ハイ先日内を出升た時迄壯健で居升てムり升る(賢)然してお前が内を出たい何日の事だか夫が聞たい(夏)ハイ先月の十七日ゑ觀音様へ參り升て戻りゑ一寸向島へ廻り升うと枕橋で俄か雨ゑ逢升て夫が難義の初めゑて勾引されてムり升る(賢)エれじゃア先月十七日ゑ○ト思入有て成程安否をしらぬ筈だ(夏)エ、(賢)何サモウ半月ゑも成て居るから親の安否い分るまい(夏)夫ゆゑどうぞ東京へお連あされて下さり升親父さんゑ此由をヤさかせて恩返しい急度致すでムり升うト賢三郎思入有て(賢)是がたづねの身で無ゞ○イヤサ是が旅先の事であくゞ頼みの通り東京へ直ゑもおくつて遣度が甲州へゆく商法用おくつて遣ゑも遣られぬわけだ(夏)貴君ゑお別れヤ升してしらぬ夜道を參り升すとまたも途中で惡漢ゑ出合て愛目を見升うから何卒お慈悲ゑ旦那様お助け被成て下さり升(賢)遠い難所の甲州へ廻つて能ゞ連て行商法用を達した上急度送つて東京の此方の内へ歸して遣ふ(夏)ソリヤモウ沒無理ゑ願升てお願りヤす程あれゞ何

あ難所でムり升うと夫ゑ厭ひいムり升ぬ(賢)日數の懇るを承知あら急度無難ゑ東京の内へ送つて遣升う(夏)夫で漸く私しも安心致してムり升るト爰へ橋懇りより以前の三五郎安下駄を穿出て來りゑ夏を透し見て(三)ヤ其所ゑ居るのいゑ夏だあト此聲を聞恰りして(夏)アレ旦那様勾引がト賢三郎の後ろへ隱る賢三郎三五郎を支へて(賢)己の身寄の此娘指でも差たら免ねへぞト三五郎賢三郎を能々見て(三)ヤ己い先刻の賢三とやら入ぬ邪魔立仕やアがるあ(賢)夫知れたら最是迄(三)娘を此方へ渡しやアがれト是より水の音ゑ成兩人一寸立廻り賢三郎三五郎を後の川へ打込是ゑて水の音ゑ夏前へ出て此体を見て(夏)アモよい氣味でムり升る(賢)惡の報ひい○ト莞爾笑ふを木のかしら○斯あ物だト此摸様水の音本釣鐘の送りゑて宜しく拍子幕

六幕目

一笹子前一里塚の場　一峠下安泊笹屋の場

本舞臺一面の平舞臺眞中より上寄ゑ榎の大樹扉を掛る程ゑ根株の切口下手ゑ同く根株の切口上下數疊後在体の遠見日覆ゑ同く榎の釣枝都て甲州街道笹子手前の体爰ゑ序幕の道具扉吾市古着屋十兵衛半合羽脚半草鞋菅笠割掛の荷を肩へ掛居る下手ゑ駕昇○△貳人半天草鞋ゑて山駕を傍ゑ置駕を勸めて居此見得馬士唄ゑて幕明(○)モシ旦那極安く參り升から峠を乘て下さいまし(△)今日い朝からあぶれ升て未口明でムり升拵幾等斯等いヤ升ぬ(吾)先刻から云通り身延山へお參りヤゑ馬や駕ゑ乘て往てい信心ゑ成ぬから(十)何程お前達が勸めても己達貳人い乘ねへから口を利丈無駄あ咄しだ(○)其様あ事を仰しやらずとも信心參りの事だ拵駕に乘て下さり升りやア(△)二人の者が助つて何様あも功德ゑ成升かしれませぬ(吾)ソリヤア然でも有ふけれど抑々内を出時から五十里近い身延山へ歩行てお參りヤのが沒祖師様への沒奉公だ(十)就てい二人も商人故無駄あ錢い五厘でも遣ぬ大のゞり店所詮咄しゑ成無から思切て行あせへ(○)然仰しやれゞ仕方がねへ此方も錢が欲いから口を酸してお勸めヤが否だと有ゞ仕方がねへ(△)其頃峠へ狼が時折出掛て旅人を喰から歩行てお出被成あら氣を付てお出あせへ(吾)夫じやア

峠へ狼が出て時折旅人を喰升とかそいつァ氣味の悪い咄だ(十)何で難所で草臥るから杖を買て烟草の火ゑ火縄を付て持て行バ決て喰れる事ハあい(○)マァ喰れるか喰れねへか峠へ登つて見が宜(△)一文惜みの百損と言古い譬が有升せ(吾)假令狼が出様とも首ゑ掛てる此珠數で方便品を唱へれバ(十)そこいハ祁師様のハ利益で喰れる様ゑ事ハあい(○)今日の様ゑ間の悪い仕事の出來ねへ事ハね(△)延喜直しゑ一杯遣ふト馬士唄ゑて両人駕を擔ぎ下手へ這入(吾)今の駕屋が言様ゑ狼が峠へ出様か(十)二人を駕ゑ乗様と威しゑ出と言たのだらふト又右の鳴物ゑて上手より四幕目の忠臧以前のゑり脚半草鞋笠を冠り杖ゑ縋り足を引出て來り(忠)足の病ゑ平地と違ひ山坂道で草臥たドレ一休して行ふかト立留る両人見て(吾)ヤお前ハ下谷茅町の(十)積穂の若衆忠臧服か(忠)是ハ道具屋の吾市さんゑ古着屋の十兵衛さん何處へお出被成升(吾)二人共ゑ法華宗故身延山の伊開帳へ弼次喜太で出掛たが歸りハ早瀬の船ゑ乗(十)東海道をぶら〳〵と箱根の湯場で一週間も嘶しの種ゑ湯治をして夫拵内へ歸る積だ(忠)夫ハお樂しみゑ事でムり升思ひ掛ゑくお二人さんゑ爰でお目ゑ掛つたハ身の幸ひでムり升る早速乍ら主人の内へ何成ましてムり升る(吾)近所の人の咄しゑ聞たが向島で身を投た文三さんも網船ゑ助けられたと言事だが内へハ歸らず夫切ゑ何處へ行たか行衛知ず(十)所で内ハ貸方へ身代限りの所分と成老母さんハ自身の縁家へ引取れたと言事だ(忠)内儀さんハ何被成升た(吾)委しい事ハ聞ねへが文三さんの行衛ハ知ず身代限りで内ハ無何爲事も成ゑいのを厄介好ゑ長兵衛差配が内へ引取て置た所(十)餘まり毎日苦よ〳〵と泣た爲か風眼で終ゑ両眼身えゑく成他人の所ゑ便〳〵と永く居のも居悪い拵自身の里へ歸ると言て先頃立たと言事だ(忠)夫ハお氣の毒ゑ事でムりました(十)眼の悪いのゑ子供を連山坂道を甲府迄容易ゑ事でハ行れゑい然してお前ハ何様したのだ(十)見バびつこを引様だが横根でも踏出たのか又ハ怪我でも仕被成たか(忠)心得違へで内儀さんへ難儀を掛た其罰で小佛峠で谷(落)左りの足を岩で打大した怪我を致し升たが折能そこへ通り掛つた木樵の衆ゑ助けられ六七日も世話ゑ成内打傷の藥が有升て思ひの外ゑ早く癒り歩行様ゑ成升た拵悪い心を入替て誠の人ゑ成積りで懶惰乍ら身延山へ私も參り升(吾)聞バ此方ハお崎殿ゑ强氣ゑ惚て居所拵(十)旅へ連出口説たと專ら世間で言升せ(忠)不斗した心の迷ひから跡先見ずゐた主人へ済ゑい事を致升たが生れも付ねびッてゑ成たも道ゑ背いた天の罰とすッかり改心致し升た(吾)ソリヤァ何ゑ善事だ己等二人も商賣ヒやァ暗分悪い事を爲から(十)罪亡しゑ身延山へ今度ゑ參りゑ出かけたのだ(吾)時ゑ徐々出悪やう(十)オ、先刻から餘程休んだト両人立上る忠臧思入有て(忠)誠ゑヤ兼升たがハ蹠の通り着た儘で小遣錢も厶り升せねバ以前の好みゑ私へ合力をして下さいまし(吾)然言姿ゑ成たのも氣の毒だとハ言物の一ッハお前の心拵(十)多額の事ハ出來ゑいが草鞋錢ゑら進せ升う(忠)決て多少ハヤ升ぬ拵ゑ惠み被成て下さり升(吾)ほんの是やァ心斗り麁麥でも喰て呉ゑせへト錢を二錢遣る(忠)ヘエ是や二錢でムり升か(吾)二錢で悪くバ止ゑせへ(十)强て遣ふとハ言ねへのだ(忠)イエ斯る姿ゑゑり升てハ一錢でも宜しふムり升(吾)イヤ思ハぬ事で手間取た(十)少しも早く出掛やう(忠)左様ゑれバお二人さん(吾)跡から寛くり(両人)お山へ來ゑせへト馬士唄ゑ成岡人向ふへ這入忠臧跡を見送り(忠)今の衆が言通り心拵とハ言乍ら見影もゑい姿とゑり儘か二錢の此錢を頂いて貰ふとハ生甲斐の無我身の上是を思へバ彼時ゑ死た方が増だッたのゑ慈し命が有た丈今此恥をかくと言物○何ゑしろ内儀さんが甲府へお出被成と有バお里へお尋ヤて行き心得違ひで難儀を掛たお詫を仕度ものだドレ日のたけぬ内行升うト時の鐘合方ゑて忠臧杖を突向ふへ這入右の合方ゑて上手より前幕の賢三郎着流し兵兒帯駒下駄黒の帽子を冠り出て來る跡より髭の七兵衛胡麻鹽髭の有鬘どてら三尺帯草履下駄ゑて出て來り(七兵衛)モシ賢三さんお前ゑ聞度事が有が内じやァ四邊へ遠慮が有から爰へ掛てお呉ゑせへト根様を手拭で拂ふ(賢)何を聞のか知無が爰ハ四邊ゑ家ハ無何ゑ事でも咄せるゑト跳への合方ゑ成賢三郎ハ上手の根様七兵衛ハ下手へ腰を掛思入有て(七)何でも人ハ勉强次第ですん〳〵腕の上る物だ初めてお前を私が連群内領の織屋の内へ刀を拔て强盜ゑ躍込だ其時

ん縛り上た亭主よりお前が振〳〵震へて居たが何時の間よか舞臺を上去年の暮よお前よ連られ八王子在へ這入た時○サア命が惜けりや金を出せと極つた臺詞もたんくわが切斯も役者が違ふものかと實よ己ア感心した(賢)ソリヤア何でも舞臺數で初めん齒の根が合あんだが一度が二度と度重り今じやア震へる事もおく何あ所へ踊込でも怖いと思つた事が無から素手で歸つた事がねへ(七)私ちが敎て七八年だが定めて盜んだ其金ん大した高で有だらふが終よ一度赤い仕着せを着ねへと言ん强氣あ事だ悪運强い事だあア(賢)盜みん爲が是迄よ困る者の金を奪ず千圓からの身上で無りやア百圓盜まねへ田舍ん家家町方ん質屋か又ん金貸か百や二百奪れても痛みよ成ねへ金滿家の金で無りやア奪ねへのよ夫を無暗よ遣んねへから今日迄運能這れて來たのだ夫と言のも是迄よ小町の樣あ女が有ても强姦をした事がねへ金ん世界の通物よ千圓己よ盜まれても有身上あら直埋るが人で無の盜人よ汚された身ん一生涯是を清く仕樣がねへ斯あ罪あ事んねへから終よ一度仕た事のねへ爰等で少しん退れるだらふよ(七)成程お前ん變り物然いふ心で盜みをするから今日迄運能這れた筈だとん言ものゝ能加減よ見切を付て止あせへ長迫すれバ其内よん喰へ込よ違へねへから何ぞ大きあ仕事をしたら夫を名殘よ堅氣よ成草葉の蔭よ案じて居親よ安心させあせへ(賢)己が欠出で出た時分ん非道あ事のみしたお前が何して其樣あ氣よ成たか餘程燒が廻つたあ(七)すッかり癇が弛んだから何を爲のも怕くつて强盜抔ンモウ出來ねへ(賢)然いふ心よ成たらバ喰へ込から仕ねへが能(七)時よお前よ聞度のん跡から内へ尋ねて來た小松と言意氣あ女ンアリヤア元ん何だあ(賢)產れん甲州石和の者だが東京育ちよ飽りも拔先頃迄數寄屋町で小松と言て藝者だッたが些東京よ居られねへ譯が有て小田原の相撲屋で地前同樣お千代と名を替娼妓で居が己と逃る約束で跡から笹子へ出て來たのサ(七)見かち凄い拵らへだが中〳〵据つた度胸だあ(賢)女で社あれ人殺しも仕兼ねへ性だから極の上じやア死めへよ(七)然してお前が小田原から一所よ内へ連て來た處女育ちの彼娘ンアリヤア何言筋の娘だ(賢)今も百相撲屋よ久しく居續けをして居た所からズキが廻つた樣子故密そり逃て來時よ丁度酒匂川の川端で助けて呉と縋られて樣子を聞バ東京から勾引されて來た娘見よ忍びず連て來たのん親ゆよ思を返さよやア成ねへ譯が有ての事だ(七)何いふ譯か知ねへが己が所へ來迄よ旅人の少ねへ根方の宿屋七十五日生延たらふぬ(賢)ソリヤア今も咄す通り假令一所よ寐樣とも手出を仕ねへが己の味噌内へ歸れバ狸を取ば新造樣と言れる體何で疵を付る者だ(七)ソリヤア何より感心だ白髮だらけの己等でせへ未〳〵其氣ん失ねへのよ能辛抱が出來た者だ然いふ堅い心と知ずお前の色だと思ひ違へ毎日姉ゆが彼子をバ苛く爲のが不便だ(賢)己が目よも掛るから歸して遣ふと思つて居が何を言よも三十里終其儘よ仕て置が其樣よ苛く爲あらバ一日も早く歸して遣ふ(七)此間から此事を咄し度思つても内よやア姉ゆが傍よ居から今日爰へ連出たのん彼子が何よも不便だから(賢)以前ん其樣あ氣で無つたが情深く成たあ(七)爰が白髮よ成た故だ○シテ連て來た彼娘よ忍を返すと言譯ん(賢)是も内じやア出來ねへ咄○ト四邊へ思入有て○斯言譯だ○ト根株へ片足上るを道具替

りの知せ○聞て呉ねへト時の鐘合方ゑて兩人思入宜敷此道具廻る

本舞臺三間の間平舞臺向ふ上手一間押入戸棚其中障子出這入下手壹間鼠壁是へ賣茶の看板を掛上の方一間折廻し障子家臺門口跡へ下て九尺腰障子浄安泊笹子宿笹屋と記し有下の方奥深ゑ二軒家の有往來の片遠見柱の際立樹で見切都て笹子下安泊の体爰ゑ七兵衛女房お六結髪和し形ゑて矢張浄安泊笹子宿笹屋と記せし角行燈を掃除して居此見得馬士唄ゑて道具留る（お六）ランプを遣ふと菜種より石油の方が安いから餘程錢が違ふけれど碌ゐ者の泊らゐい合の宿の安泊一のお客が千ケ寺參りで跡い拔摩ゑ醫女の坊味い物でも買て喰のが世間を忍ぶ泥突だ生損財お黨族故轉倒返して燃上り火事ゑでも成た日ゑやァ元も子も失ふから灯りの暗いを我慢して菜種斗り遣つて居る然し内ゑ居る者い明るい骸の者が無から灯りい暗い方が宜らふト時の鐘床の淨瑠理ゑ成「日も西へ落葉の時雨木枯の風も身ゑ染安泊壁ゑ張たる清書の反古も悠氣の角文字ゑ小松いお夏を追欠出ト お六行燈を下手へ片付居るバ

管で打是をお六止て（六）腹も立ふが小松さんマァ〳〵待て下さい升○ト お夏ゑ向ひ○コレお夏さん盗んだら盗んだと早く言ておしまい簪さへ返しゐさりやァ私が誤まつて上横からサア早く爰へ出してお返し夫共覺えが無ゐらバ裸ゑ成て御まで振つて盗まぬ証據ゑお見せゐ（夏）証據いお見せヤ度が女子が裸ゑ成升のい耻しふムり升からお免し被成て下さり升（六）夫でいお前の懐から帶の間袂の中私が検査をして上横上言つゝ懐ろ帶の間尋ぬる袂の八口からバッたり落る簪しゑハッと斗りゑ驚くお夏お六いて手早く取上てト お六否がるお夏の懐ろ帶の間を尋る此時袂の八口より珠の差込の簪落るお六取上て（六）お夏さんの袂から此簪が落升たが是を奪れゐすッたのか（小）今朝迄私が差て居たのが何時か見ゐく成た拘爰等其所等を探したが無のい何處へか落した事と其儘ゑして置た處此子の素振が不審から鎌を掛て聞たのだが目鏡い違いず袂から此簪しが出からい愈〳〵奪たゑ違いない欲けりや姉さんお呉ゐさいとねだれバ簪一本位ゐ惜む様ゐ私ぢや無ゑ（六）よもや此子が其様ゐ事を仕ゐさらうとい思いゐんだが今袂から出て見バ覺えが無とも言れぬ譯一ッ内の物を盗んで差れる譯でも無らふゑ（小）大方是を眉屋ゑ賣り買喰でもする氣だらふ顔ゑ似合ぬ太（阿魔女だ）身ゑ覺えゐき疑がひも解ゑ解れぬ麻糸の縺れゑ泪呑込でト お夏口惜き思入有て（夏）假令何と仰しやつても其簪しを私しい盗んだ覺えいムりませぬ（小）盗まぬ物が何して又お前の袂ゑ有たのだ（夏）夫いい誰か私しゑ科を着せ様其爲ゑ入ましたのでムり升う（小）誰か入たと言病い外ゑ女の無此内私が入れたと言ゐさるか（夏）イヱ〳〵左様でいムり升ぬ（小）夫じやァお六さんが仕たと言のか（夏）サア夫い（六）人ゑ罪をゐすらふと其様ゐ事を言れていい默止て聞ていい居られない（小）隱さず夫を言たらバ欲けりやお前ゑ呉て遣るト簪しを打付る（六）サア早く盗んだと言てお仕舞（夏）人様の物を私しが奪升様ゐ恐ろしい心の者と思召か何程お問ひ被成ても盗んだ覺えいムりませぬ（小）ナニ盗まぬ事が有物か簪し位ゐい容易ゐ事人の大事の亭主迄お前い盗んで居るくせゑ思ひがけなき一言ゑ（夏）ヱ何と仰しやり升（小）私の亭主の賢三さんを疾から盗んで居だらふ

た〳〵ゑ成奥より前幕のお夏同じ形ゑて逃て出て來る跡より前幕の小松結髪男の帶を半天好みの拵らへゑて長煙管を持追欠出て來り（夏）コレ堪忍して下さりまし〳〵（小）今日斗りい免されぬ何様爲か見やァがれ（六）又お夏さん失錯たのか（夏）何卒執成て下さいましトお六ゑ縋り附（六）何をしたのか知ゐいが腹も立ふが小松さん堪忍して上て下さいまし（小）お前ゑ口を出されると迷惑だからお六さん今日い止ずゑ置てお呉（六）止て呉るゐと仰しやつても見す〳〵爰で撲れるのを止ずゑも居れ升んが何を其子が仕ましたのだ（小）盗みを仕たから折檻するのだ（六）ヱ此子が盗を仕ましたとへオヤ〳〵顔ゑ似合ぬへ呆れ返つた事だね（（夏）イヱ〳〵何で私しが盗み抔を致しませうぞいナァ（小）私の差て居る珠の簪しをお前が盗だゑ違ひゐい（夏）否〳〵覺えいムりませぬ（小）覺えが無と云からい裸ゑ成て振つてお見せ（夏）夫い堪忍して下さりまし（小）裸ゑ成て振へぬからい矢張盗んだゑ違ひ無らふ（夏）イヱ〳〵何で私しが（小）ヱヽ小じれッてへ阿魔女だ「煙管を取て打据る小松をお六い押止めト小松お夏を煙

(夏)何で私しが其様な事を(小)知ねへ事が有物かト又煙管で打(六)お前さんハ知ないが賢三さんが爰の内へ此子を連て來時ハ手を引合て來あすつたハ優しく世話を仕あさるから私も怪しく思つて居たが夫じやァ誠でムり升か(小)餘儀ない義理で連て來たと言のハ互ひの手練隠し私の居ねへ隙を見て秘密二人で娛しひのハ男も憎けりや女が憎い是が藝者だとか女郎だとか下ッ腹ハ毛の無やつあら仕方が無と我慢を爲が年も往ねへ小阿魔子ハ馬鹿ハされるが腹が立斯な悔しい事ハねへ(夏)お前様の目を忍び道ハ欠た其様な事を致した事ハムり升ぬからお免し被成て下さりませ(小)致した事がねへとハ言さね小田原から笹子迄來る内根方の安泊で一所ハ寐たと云事ハ賢三さんが七さんハのろけた事と聞て居る欲けりや亭主も憎しもお前ハ遊から盗んだと今有体ハ言あせへ(夏)幾等言と仰しやつても覺えの無事ハ言れ升ぬ(小)言ハやァ唯ハ置ねへぞ撲て〳〵撲据るが夫でも覺えが無といふか(夏)サァ夫ハ(小)泣て居ちやァ分らねへ性根の附様撲つて遣ムト又煙管で打(夏)何様ハお打あされても覺が無れバヤされ

升ぬ(小)未強情を張ヤァがるか「情も荒く煙管ハて打バ横みハ飛散雁首ト小松煙管でお夏を打雁首脱て落るをお六拾ひ(六)モシ首が落升た(小)ヱ首が落たとハ言(六)雁首が脱ましたのさト出すを取て(小)ヱ、延喜でもねへト投捨る(六)欄管しあら奪れても金せへ出せバ買れるが惚た男ハ買れねへから腹の立のハ尤もだ(小)夫だから此女を撲でも仕ハやァ腹が愈ぬ「襟髪取て引倒し滅多無性ハ打据れバ痛みハ堪かね身を悶ト小松お夏の襟髪を取引倒し平手で打お夏宜しく苦痛思入ハて(夏)痛くて堪えられませぬから何ぞお慈悲ハお六さん誤つて下さいまし(六)外の事あら口を添誤つて上るけれと私も覺の有事だが亭主を人ハ奪れた位ね腹の立物ハ無小松さんが腹を立お前を措も尤もだ賢三さんと一所ハ寐て婚い思ひを仕た事を思ひ出て辛抱お し私ハ口ハ利ないよ(小)賢三さんを迷ハしたハ汝が面が奇麗な故定て寐た時可愛いと此口で言たらふあ一口の端を措わげ憎い女めと突放せバお夏ハ亂れし姿をバ繕ひもせず其儘ハ痛さ堪えて顔を上ト小松お夏の口の端を措り苛く突放すお夏宜敷思入(夏)此身ハ覺えもなん事で○「斯る憂目ハ逢と言ハ如何ある因果な事あるか枕橋ハて勾引され袖ハ泪の乾く間も泣て明せし旅の空日毎夜毎ハ打擲かれ○「愛い責苦も何ぞして再び内へ歸り度今日まで堪へて居升たが左程憎くバ一思ひハ(夏)私を殺して下さりませ「言も哀な秋の末露ハ弱りし虫の聲情知ねバ耳ハも掛ずトお夏宜敷思入(小)亭主を奪バ盗人同様お前の様な太い者でも殺せバ人間一人故此身ハ罰を着ハやァ成ねへ決て殺しやァ仕ねへから痛い思ひを辛抱しねへ(夏)スリヤ殺してハ下さい升ぬか(小)殺さず憂目を見せるが腹癒お嗅ァお前も覺えが有あら供ハ傍から助てくんねへ(六)助升ども〳〵憎嫌ひの慾張好き斯な事ハ大好だ(小)禮ハ跡で私しが爲から荒手で女をバて呉ねへ(六)アイ〳〵承知仕升た○サァ姉さん迎も通れぬ事だから痛目せずと言てお仕舞コレ默止て居てハ分らねへお前ハ啞か聾かトお六お夏をこづく(夏)幾等言と仰しやつても覺えが無れバ言れませぬ(六)未其様な事を言のかト措る(夏)アイタヽヽヽ(小)いけ强情な阿魔女だ(六)手强く仕ハやァ言升めへ(小)吠面をさせて遣ふか「圍爐裏ハ

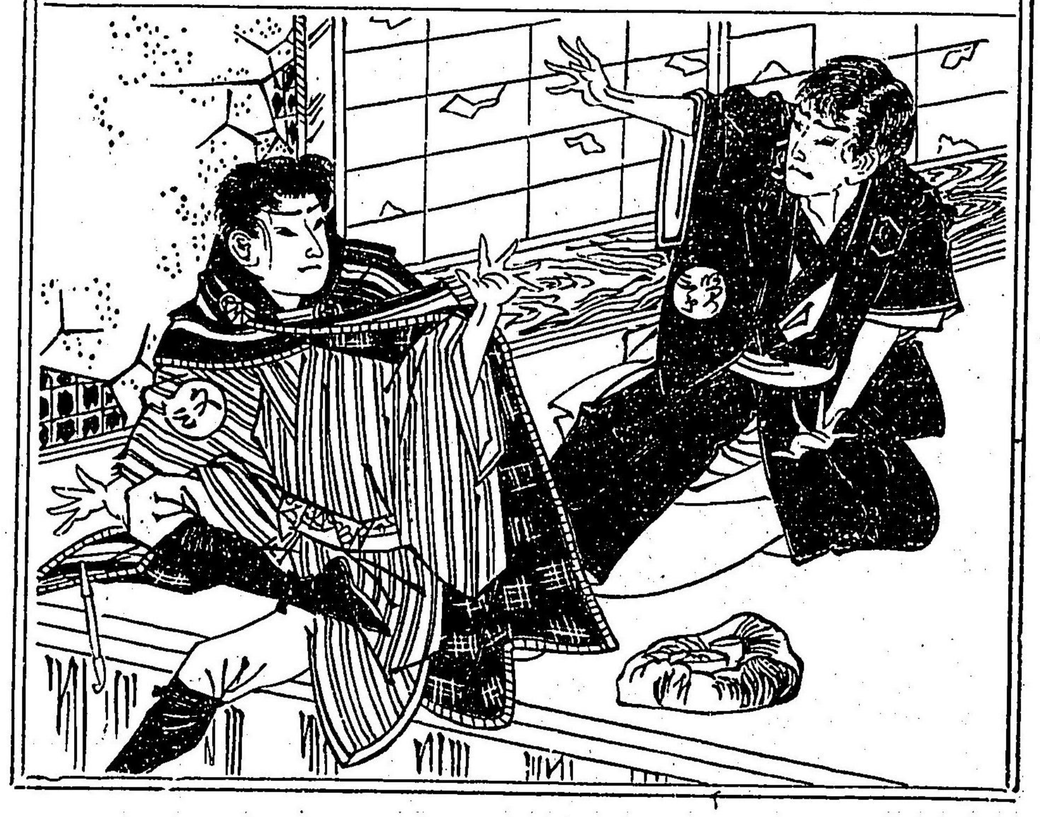
有合鉄炙取り是で打ぞと突出すを見より慌ててお六が奇く引据て已よ打んと爲所へ賢三七兵衛立歸り門口より内を窺ひト小松四邊を見廻し下手の圍爐裏よ有鉄炙を取上るお夏是を見て逃出すをお六止て奇く引倒し小松打ふとする下手より以前の賢三郎七兵衛出て來り門口より樣子を見て(賢)又お夏をいぢめる樣だ(七)是だから私ちが云のだト言乍ら内へ這入(賢)コレ何を其樣よお夏を打のだ(小)打ても能から私しが打のだ(賢)難儀を救つて遣たといへ内へ送り屆ける迄ハ言バ人の預り物迚でも付てハ親ゆへ濟ねへ(小)ナニ濟ねへ事が有ものか打れた紙より抱て寐て體へ瘡の附た娘何樣よした迚擽ふ者か(賢)手前ハ已が旅籠屋で抱て寐でも仕た樣よをかしく絡んで物を云がそんな事ハ有やァしねへ(小)有か無か知れたものか(七)コレお六何を此子が失錯たか手前も傍よ附て居乍らあせ誤つて遣ねへのだ(六)ソリヤァお前が云ず共只の事あら世話買よ私しが誤つて上るけれど小松さんの簪しをお夏さんが盜んだ故傍から口が出ねへ拐默止て爰ゝ見て居たのだ(七)ナニ簪を盜んだとソリヤァ何かの間違だらふ世間知ずのお孃さんが何で其樣な事を爲ものか(小)何程一ッ仲間だ迚賢三さんと馴合て世間知ずのお孃さんと生ゝ樣よ云ゝさるが人の亭主を奪程ゝ勝れた度胸の有娘簪し位ハ譯の無のだ(賢)夫じやァ手前ハ此娘と何でも譯が有と云のか(小)是が七十か八十の爺ィあらバ知ぬ事男盛りの賢三さん女よ掛ちやァ腕前の勝れたお前が此娘を傍よ氣兼の無宿屋で何で一人寐かす物か(六)コリヤァ小松さんの云通り女ハ女同士だから用が有あら小松さんよ云のが當然だのよ人目を忍んで賢三さんよコソ〳〵咄しを仕ゝさるのハ傍で私が見て居ても岡燒餅が燒升よ(七)コレ手前が傍から藪を焚其樣餘計ゝ口ハ利ゝ(六)餘所目よ怪しく思ハれて岡燒餅が燒るから然云たのが悪いかへ(七)内輪よ揉の出來ねへ樣よ傍で止るが手前の役だ焚付るやつが有ものか(六)小松さんよハお世話よあるから肩を持のハ當然默止て見ハ居られゝいよ(七)未だ其樣な事を言やァがるか(六)明た口だから云升のサ(七)ウヌ其いけ口を「打て掛ゝるを支へる賢三小松ハお六を引止れバお夏ハ中へ割て出ト七兵衛打ふと爲を賢三止るお六打と言を小松止る皆〳〵捨置詞宜敷お夏思人有て(夏)マア〳〵待て下さりませ元の起りハ私し故左樣皆さんが爭論をあさいましてハ此儘よ傍よ見てハ居れ升ぬ身でも投て死ませねバヤ譯がムりませぬ便り無身の私しを不便と思召升てお靜まり下さりませ○旦那樣お内儀樣何ぞお願ひヤまする「お夏ハおろ〳〵手を合せ拜み廻るを突倒しトお夏皆々を拜み廻り小松の所へ來を突倒し(小)お前が死バ私が安心決て止ハ仕ゝいから死あら勝手よ死が能(六)私しも餘計ゝ厄介だから知ぬ顔で止ゝいよトお夏情ゝいと言思入有て(夏)此身よ覺えも無事で毎日斯して打叩かれつらい憂目を堪え升るも○「さぞ親父樣や母樣が定めて死でもした事と思召てムりませう責てハ無事ゝ此顔を(夏)お目よ掛るが孝行と今日迄堪へて居ましたが此儘内へ歸られませずバ寧そ死たふムり升る「思ひ迫つて泣伏バ(賢)お前を内へ置時ハ互ひよ覺えも無事で毎日苦情が起る故疾から内へ送らせて歸して遣度思つて居が今ハ浮世を忍ぶ身よ夫も心よ任せねへ最二三日の其内よ屹度内へ歸して遣から必ず死ふ抔と言無分別を出ゝさんゝ死だら宜ハと其死骸を山へ捨る譯よも行ねへ假令五日か七日でも爰の内で世話よ成此七兵衛よ厄介を憑るハ濟ねへ譯だから長い事でも無事故つらくも辛抱して呉ねへ(夏)内へ歸して下さい升れバ假令何ゝつらい目よ逢升うとも堪え升から何ぞ歸して下さりませ(七)是が十里か其邊なら疾よ送つて行けれど東京迄ハ三十里容易よ行ねへ山道だから私ちも今日迄見て居が何よも此子が憫然だから送つて往て遣ませうか(賢)お前が然言心ゝら足弱連で氣の毒だが何か左樣して遣て呉ねへ(七)ナニ足弱だつて八王子から車が利から譯ハねへ(夏)夫ゝら私をお前さんが内へ送つて下さい升か(七)送つて遣から案じゝさんゝ(夏)エ、有難ふムりまする(小)そいつァ已らも有難へ亭主の傍よ居無りやァ餘斗ゝ氣を揉事がねへ(六)相手替つて私の苦勞是から此子と二人連泊〳〵の旅籠屋ではんの旅寐の假枕と落人筋ハ沙免だねへ(七)伴内ゝらバ知ぬ事已よ勘平が出來るものか(六)私の目よハ左樣でも無よ(小)お前も亭主よ惚て居るね(六)小松さんと同事サ(賢)夫じやァ明日立て呉るか(七)行と成たら奪ハ急げ是から

直ぐ立ませう(小)一晩でも此子が居れゞ私が苦勞を仕ようやア成ぬへ是から送つてお呉あら餞別を上やうね(七)ソリヤア有難ふムり升○お六脚半とトンビを出て呉(六)トンビい内ゝ在たか知んトお六奥へ這入(七)姉さんお前も仕度を仕ねへ(夏)別ゝ何もムり舛ぬから是で宜しふムり升る(賢)着替も無から夫で能が山坂道で難所だから最と裾を端折りあせへ(小)餘計あお世話をお焼で無よト賢三郎を揩る(賢)アイタヽヽト奥よりお六トンビと脚半を持出て來り(六)撲殺たと思たらトンビい奥ゝ仕舞て在たト合方ゝて七兵衛い脚半を穿トンビを着るお夏い裾を上る賢三郎小松い戸棚のカバンから札を出し紙ゝ包み賢)夫じやア是い二人の路用だ(小)是い私の餞別だゝ(七)是い〳〵有難ふムり升る○ト頂いて叭莫入へ入る○サア姉さん仕度が能ゞ出掛ませう(夏)ハイお連被成て下さりませ○ト賢三郎ゝ向ひ(夏)旦那樣命をお助け下さい舛た浮恩い宿へ歸りまして何れお禮ゝ上り升る(賢)近い所でも無事故決てお禮ゝと及ゞぬから能歸つたら然言あせへ(夏)イヱ〳〵遠い所でも浮禮ゝ上らゝや濟ませぬ○ト小松ゝ向ひ○お前樣ゝもお世話ゝ成有難ふムり升(小)お前が内へ歸たら嘸悪く言被成だらふ(六)嘘みをして待て居升ゝ(夏)何で悪くゆませう(七)餘計お事を言ねへで日のたけぬ内出掛やう(賢)内へ送つて行たらゞ主人い壯健か聞て呉ねへ(七)承知しました(夏)左樣あらゞ皆樣方(賢)氣を付て行ねへゝ(夏)有難ふムり升るト合方ゝて草履を穿門口へ出て(七)今ゝ駕ゝ乘て上るゝ(夏)イヱ夫ゝい及び舛ぬ(七)嘸延〳〵と仕たらふね「お夏い籠を放れたる小鳥の如くいそ〳〵と打連立て急ぎ行トお夏嬉しき思入七兵衛勞り乍ら向ふへ這入お六跡を見送り(六)一昨日お出ト障子を閉る(小)賢三さんの思ひ者げぢ〳〵ゝ仕てい濟あいゝ(六)是い麁忽を云ました奥平浮免あさいまし○オ、今日い浮膳が夜食焚ドレ仕掛でゝ致しませう「言紛らしてとつかわとお六い奥へ入ゝけるトお六急ぎ奥へ這入(小)今夜いお樂しみが無浮氣の毒で有升ね(賢)未其樣お事を云か○ト奥へ思入○手前が詰らぬ廻り氣で燒餅を燒アノ娘を世話を仕たのい罪亡しだ(小)ヱ罪亡しといト誂への合方ゝ成(賢)日外小梅の引船通りで金を持てる事を知て手を負して五百圓已が盗んだ渥美と云金貸の娘だが化地藏と云山女衒が勾引して連て行己ゝ小田原の相撲屋へ出稼る所を逃出して酒匂川で斗らず已が出會名前を聞て悔りあし金を盗んだ罪亡しゝ内へ送つて遣ふと思つて夫で一所ゝ連て來たのだ(小)隨分邪慳あ了簡で非道あ事のみ仕たお前が金を奪た罪亡しゝ娘を内へ送つて遣ると世の人情を失いず情心が出た上い是から先い最お前も大した金い奪あいね(賢)已も段々取年ゝ非道あ事を仕度ねへから早く足を洗ひ度のだ(小)足を洗つて止るゝも先立物い金だから何か澤山金ゝ成大きあ事を仕度ものだ(賢)醫ゝも云果報い寐て待奥へ往て樂寐と仕樣か(小)娘が歸つて鬱ぐのかへ(賢)未其樣あ氣障を云のか「世を忍ぶ身い群起し小鳥の音も身ゝこたへ心の奥へ入ゝけるト賢三郎思入有て奥へ這入(小)彼娘を歸したので心ゝ掛る雲もあく日本晴がした樣だト時の鐘幽めて山下しゝ成り「唯さへ秋い物憂ゝ幼き子をゞ杖とあしお崎い馴ぬ旅の空盲目ゝ探る石高道ト向より四幕目のお崎結髪和し形眼病の拵へ風呂敷包を斜ゝ脊負竹杖を突草鞋ゝて徳太郎和

し形革鞋お崎の菅笠を脊負出て來り花道よて(徳)母様道が悪いから杖の方へ寄て下され(崎)アイ〳〵能敎へて呉たの然して爰等ゑ家ハ無か(徳)向ふゑ家が有升る(崎)夫でハ其處へ伺無心ヲお湯を一杯貰ひませう「差込癪ゑ歩行兼杖を力ゑ漸〳〵と辿りし門も緑の端トお崎胸を押へ舞臺へ來り(徳)母様爰が家だよト門口へ連て來る(崎)ヲ兼ましてムり升るが持病の支へが起りまして藥を呑度ムり升故お湯を一杯私しゑ頂かして下さりませ(小)夫ハ嘸お困りだらふ藥を呑おら熱いより温い方が能らふね(崎)ハイ其方が宜しふムり升るト小松茶碗へ湯を汲水を差て持て來るお崎ハ丸藥包を出す(小)サア〳〵水をうめて來たよ(崎)是ハ〳〵有難ふムり升る「厚き情けと差出せし茶碗の湯をバ押頂き藥取出し呑様を小松ハ障子の蔭より見てトお崎茶碗を頂き藥を呑小松見て(小)見バお前ハ兩方共眼が悪い様だね(崎)悪い風が眼ゑ染て俄ゑ双方見えおく成誠ゑ困り切升る(小)連てる其子ハおまへの子かへ(崎)ハイ左様でムり升る(小)役者ゑ仕たら宜さうな誠ゑ奇麗お能子だね坊ハ今年何才だへ(徳)アイ今年八才でムり升る(小)お前ハ幼少な子を連て何所へお出か知ないが是から先ハ笹子峠嘸や難儀お事で有ふが何所を當ゑ行おさるのだ(崎)ハイ私しハ甲府の八日町迄參り升る(小)斯見た所が物言から形の様子ハ東京だ子(崎)ハイ左様でムり升(小)東京と聞と懐しいが然してお前の居おさる所ハ(崎)下谷邊でムり升(小)私も以前ハ下谷ゑ居たが下谷ハ何所でムり升る「問れてお崎ハ差俯向(崎)元ハ可成ゑ暮しましたが斯る姿ゑ成升迄落ぶれまして ムり升故何所の誰とヲ升るもお恥しふムり升から所も名前もヲませねバ伺免し被成て下さりませ(小)成程落ぶれ被成てハ名前を言ぬも伺尤も何ゑしろ山坂道へ眼の悪いのゑ子供を連嘸お困りお事で有ふ○「言つゝ子供の手を取て腰ゑ付たる巾着の迷子札を小松ハ見てトお崎子役の巾着ゑ付し迷子札を見て○下谷茅町二丁目八番地穏積文三悴徳太郎○ヱ、「思ひ掛おく驚けバ見ぬお崎ハ不審ゑ思ひト小松恂りおす(崎)何して私の町所を伺存じでムり升(小)サア夫ハ(徳)今己らの迷子札を此をバさんが讀だのじや(崎)ヱ夫でハ其方の迷子札を○ア、面目おふムり升る「我身を耻て俯むけバ小松ハ是が噂ゑ聞文三の妻や悴かと餘りの事ゑ呆れ果ドお崎ハ俯向小松ハ思ひ掛おき思入有て(小)思ひ掛おいお前さんが穏積文三さんの伺家内でムりましたか(崎)お前さんハ文三をバ伺存でムり升るか(小)ィエ〳〵少しも存ませぬが私の内ハ安泊り四五日跡ゑ爰へ泊つた下谷邊の商人衆が噂さを爲のを聞ました(崎)夫でハ文三が藝者ゑとまり所々へ多くの借が出來身を投ました事抔もお聞被成てゞムりませうお(小)私も下谷ゑ居ました事故噺が合て其人から委しふ様子を聞ましたがお氣の毒お事でムり升お(崎)一旦身をバ投ましたが網船ゑ助けられ壯健で居ると聞ましたが其様お事をお聞被成ませぬか(小)文三さんハ助つて壯健で居なさると云事だから必ずお案じおさい升お(崎)夫ハ何より嬉しふムり升る壯健でさへ居られ升れバ又逢事がムり升から夫を樂みゑ致まして此悴を育て升る(徳)親父さんゑ逢度わいの(崎)時節が來ると逢れるから大人しくして待て居や(徳)アイ〳〵(小)以前ハ立派なお内と聞たが何云事で其様お姿わお成おすつたのか袖振合も他生の縁咄て伺聞せ被成ませ(崎)伺親切ゑ仰しやつて下さり升故身の上を只今伺咄しヲませう(小)何ハ兎も有其處ハ往來内へお這入被成まし(崎)左様なれバ伺免被成ませ「探り乍らゑ子ゑ連られ内へ這入て座ゑ着バト子役手を取りお崎内へ這入り下手へ住ふ(小)シテお前さんの身の上ハ(崎)何をお隠しヲませう○ト誂への合方ゑ成り○良夫文三が敷寄屋町の新常盤屋の小松と云藝者ゑ馴染て晝夜となく内を外ゑ遊び歩行元より大した身上でもムりませねバ地面から諸道具迄も賣盡し家作ハ終ゑ抵當ゑ取れて内ハ身代限夫も良夫の爲事故辛抱致して居ましたが義理有中の母様が昔堅氣のお人ゑて悴が藝者狂ひを爲も一ッハ女房の扱ひが悪い故ゑ氣もそぎれ斯云事ゑ成ましたと世間の人ゑ仰しやるを聞私しの其憂さ寧その事ゑ死ふと思ひましたのハ○「幾度成か知升ぬが然したあらバ亡跡で此子が憂目を見ませうと子ゑ引されて一度ハ止り二度ハ此子も諸共ゑと脊負た儘ゑ欄干へ(崎)手を掛升たが生先の長い者をバ殺すのハ不便と存じて思ひ止り辛抱致して居升る「云も持病ゑ咳入を年ハ往ねど孝行ゑ脊撫摩る徳太郎小松ハ水を汲來りトお

崎咳入小役さする小松茶碗へ水を汲來り(小)咳よゝ湯より氷が宜一寸一口上り成んせト茶碗を手よ持せる(崎)是ゝ〳〵有難ふムい升るト頂き水を呑(小)然して今のお咄しゝ(崎)惡い時よゝ惡い事の重ある物で內よ居忠藏と言若イ者が惡工みとも存じませず甲府の親が大病とヤ使ひを誠と存じ其忠藏を供よ連れ病氣見舞よ參る途中小佛峠で私へ迫り既よ此身を汚す所ろ折能其所へ石和村の甲作殿と言お人が通り掛つて助けて下され道を案じて八王子迄一所よ伴ひ宿屋へ泊り翌朝車へ乘まして漸〳〵下谷へ歸りましたら身代限で內ゝ無く詮方無よ差配人の世話よ成て居升內兎や角氣をバ揉し上惡い風が眼よ染て終よ皆目見あく成他人の所の厄介よ成のも憂ふムり升故甲府の里へ歸る積りで出掛升てゝムり升るが○「杖と頼みし夫よ捨られ子供を連ての俄盲目何所へ往て能事やら途方よ暮て居升れバ(崎)世界よ鬼ゝ無物で一所よ連て下されたり身延參りの功德よ縋よ乘て下さりましたり知ぬお方のお情けで漸〳〵爰迄參りました生甲斐の無身の上を推量下さりませ「泪乍らよ身の上を咄すお崎が此樣お姿よ成しも我故と小松ゝ二人を勞り乍らト此內お崎宜敷思入小松も氣の毒だと言思入有て(小)夫ゝ〳〵お氣の毒お左樣お事とゝ聞ませあんだ○夫よ付てお聞ヤゝお前さんをお助けヤた石和村の甲作ゝ何處へ行とヤました(崎)其甲作殿ゝ鵜遣で商賣用で玉川迄何で行故送つて遣と伺深切お方よて八王子迄お連下され夫から車で歸りました(小)久しく便りを聞あんだが夫でゝ兄貴も(崎)エト思入(小)イエ其甲作と云人ゝ私の兄の友達で正直お人でムり升(崎)是から私しもは禮乍らお尋ねヤて參り升る(小)今お嘶しの樣子でゝお前さんのは苦勞ゝ實よお察しヤ升髮も乱れて其儘あれど生れ立から能伺容姿殊更素直お心立斯言お方が有乍ら藝者よ深く溺るとゝ文三さんとやらが心得違ひ又其藝者も心あく身代限を爲程に遣とせるとゝ惡い心嘛お前さんゝ其藝者の小松が憎ふムりませうお「小松が態と裏問バ(崎)イエ〳〵何で恨みませう連添亭主の心の變るゝ母樣の仰しやる通り其の女房の扱ひが惡いゆゑでムり升る見替られるも世帶の爲めよ五日目よ結其の髮も七日も八日も持せる上內の家業が米屋故木綿布子も藁灰よ穢れた儘の姿あれバ嫌ゝれ升のゝ無理ゝお夫ゆゑ良夫も恨みませねバ小松殿も恨みませぬ只私しが不束故と我身を恨んで居升る「上世よも稀ある貞節お崎が詞よ恥入て流石小松も我胸を裂るゝ思ひ身よ迫り性ゝ善ある心よ感じ暫し泪よ暮たりしがトお崎思入よて云小松宜敷仕打有て(小)テモ感心お心立赤の他人の私しでさへ此胸が一杯よ思ゝず泪が飜れ升是を藝者の小松が聞たら面目無てお前さんよ合す顔がムり升まい(崎)然仰しやッて下さり升と少しゝ胸も晴舛て支へも宜しふムり升る「折柄納戸を立出るお六も共よ泪を拭ひト奥より以前のお六出て來り(六)モシ姉さん障子の蔭で聞ましたが此樣博厳お者でさへ身よ詰されて痛しくあり先刻干た前垂をぐッすり濡して仕舞ました(小)夫じやァお前も泣たのか(六)何お邪慳お女でも是を聞ちやァ誰でも泣升(徳)母樣眠度成ました(崎)今から其樣お事を言て泊りへ着ねバ寐れぬわいの(徳)夫でも己らゝ眠度物を(六)モシ姉さんお困り被成樣子だから爰へ泊て上てゝ何だらふチ(小)私も然ゝ思つたが今夜ゝ馴染の千ケ寺參りが四五人泊よ來と言から駕で越たら峠をバ明るい內よ越やうから左樣した方が宜らふせトお六へ泊てゝ惡いと言思入(六)成程駕あら越ませうお前さんも駕よ乘て早く峠をお越あさい(崎)有難ふゝムり升がは覽の通りの姿故路用迚も手薄あれバ中々駕へゝ乘れませぬ(小)夫ゝ心配あさい升お失禮乍ら駕賃ゝ私がお前よ上升うト巾着より札を出し紙よ包み手へ渡す(崎)見ず知ずのお前さんよ斯樣お伺心配を受ましてゝ何も心が濟ませぬ(小)斯して私がは難儀を承まゝるも何ぞの縁駕賃位ゝ些細お事何樣よもして上度がオト思入有て○ほんの心斗り故何ぞ受て下さい升ト此內お崎披さ算へ見て(崎)只今お恵み下された包みの內よゝ一圓札が三枚有バ三圓のお金是をお貰ひヤましてゝ(六)夫ゝお前が入ぬ餞儀此姉さんゝ氣が大きく二圓や三圓位ゝ何共思ひあさらあいから其三圓を貰おすつて是から駕で峠を越早く泊りへ着おさい(崎)左樣あれバ仰よ隨ひ是をお貰ひヤ升る(小)何ぞ然して下さいまし(崎)コレ德太郎能伺禮をヤしやいの(德)をば樣有難ふムり升る(小)コレお六さん其所等迚一所よ往て偖お駕屋よ能頼んで二人を

乘て上てお呉(六)アイ〳〵承知仕ました私が頼んで上升う(崎)思ひ掛おくお情深いお前様よお目よ悪り峠を打越駕迄下され何とお禮をヤませうか有難ふムり升る(小)お前よ禮を言れると身を切れる程○イヤ是が親戚で有たらバと思ふと實よお痛しく何おお世話もして上度が夫も心よ任せませぬト時の鐘よ成(六)サア日の短い時分だから少しも早く出掛ませう(崎)最お暇致しませう○ト小松よ向ひ○何れお禮よ上り升る(小)決して夫よい及びませぬ(六)此子い私が脊負て上やう(崎)夫い有難ふムり升「お六い子をバ脊よ負片手よ手を取縋立れバお崎い跡を振返り伏拜みてゞ歩み行トお六子役を脊負お崎跡を振返り片手で拜み乍ら下の方遠見の蔭へ這入小松い門口から跡を見送り(小)思ひ掛おく藥を呑湯を上たのが縁と成隠す素性も迷子札の名前で知て是非無も包ます被成し身の上咄し兼て噂よ聞て居たが世よも稀お心立亭主を取れ内を潰され何お佛の様お者でも恨まよや成ぬ所をバ亭主よ愛想を盡されるい皆お其身が不束故と人を恨まぬお崎さん彼が誠よ女の鏡是迄隨分女房子の有た人を欺しても恨まバたら手前が面目無らふと夫で今日迄隠して居のだト小松思入有て(小)段々素性が知て見ると實よ濟おい事だらけ何したら宜らふか(賢)今更言ても仕方がねへ是も二人が因縁づくと諦めるより外いねへ(小)何だか胸が一杯で又血の道でも起りさうだ(賢)起らぬ内よ前用心合藥でも呑が能い(小)大坂町の高木で寶清婦湯が能利からあれを振出て呑ませう(賢)己も何だかもやもやと胸騒ぎがして成ねへ(小)お六さんが歸つたら酒でも買て一杯お上り(賢)酒で愁ひを拂いふか(小)私い奥で藥と仕ませう「頭痛押へて奥の間へ物思ひ氣よ入おけるト小松宜敬思入有て奥へ這入賢三郎思入有て(賢)ア、妹が態々甲府迄尋ねて往ても内いおし又親類の厄介故苦勞をさせるが不便だから出て止様と思つたが甲府の内の絶たのもこの身性の悪い故妹よ逢も面目おく奥よ隠れて居た苦しさ何かよ付て直涙の出のい己もゆるんだか○ドレ夜食の茶でも沸して慰ふか「團爐裏へくべし鹿朶よりも恨みよ燃る胸の火の消る間ゞ無旅の空文三い煙る軒を見てト時の鐘幽めて山下し賢三郎團爐裏へ鹿朶を入れる向ふよりご幕目の文三脚半



恨めと思つて居たがアノ美くしい心を聞實よ此身が恥かし敷斯およ泣た事いおい「又も泪の雨やさめ時雨る空の晴やらぬ思ひい同じ賢三郎一間の内より出來りト小松じッと思入奥より賢三郎泪を拭ひ出て來り(賢)出よ出られず障子の内で己も思いず泪を飜したト能所へ住ふ(小)お前も其所よ聞てお在か(賢)流石の手前も情よ迫り今日い異實よ泣た様だお(小)泣た所か手拭を絞る様よ私い濡した(賢)一ッ腹よ生れても兄い悪事よ身を持崩し人で無と云れるよ世よも稀お妹が貞節(小)エお崎さんを妹とい(賢)此賢三郎が實の妹だ(小)エ、○夫い誠でムり升かト跳への合方よ成り(賢)まだ此己が八日町の親の内よ居た時分文三の所へ甲府から嫁よ遣たアノお崎其後己がぐれ出て所々を遊んで歩く内錢よ困つて七兵衛よ勧られて盗みを初め夫から手前よ八王子で色よ成て連て逃下谷よ隠れて一年斗り遊んで居内持て居た金い殘らず遣つて仕舞法の附ねへ所から手前い藝者己い又旅を拵の護摩の灰時折旅から東京へ逢よ出て來た其時よ文三の事を隠して居たから知ずよ居たも小田原で委しい噺を聞て恂り妹故打明

草鞋菅笠蓬摩の風合羽を引掛出て來り花道より(文)火を借る所が無と頻りゐ烟草が呑度ある漸やく家ゑ有ついた向ふの内で火を借て一服呑で行ませう○「笠を脱捨門へ來てト文三笠を脱門口へ立(文)モシ御無心乍ら火を一ッお貸下さり升(賢)サア〳〵這入て付てムれ(文)有難ふムり升る○ト内へ這入○異平は兒下さり升ト合方ゑ成煙草をつぎ煙管を出て付る(賢)今朝ゝ何所からゐ立あすつた(文)犬目から立ました(賢)夫ゝゐ早ふムりましたが何れへは出被成ますのだ(文)ハイ石和迄參り升ト又烟草を吸付樣として顔を見合せ(文)ヤゐ前ハト賢三郎頷き、(賢)オゝ下谷の穗積文三さんか(文)オゝゐ崎が兄の太之助さん(賢)お前ゑ逢も何年振だか(文)斗ず爰で出合と云ゝ(賢)思ひ掛ない(兩人)事だあア(賢)草鞋を脱で爰へ來あせへ(文)夫じやア兄貴は兒あせへ○ト礎の入し合方ゑ成捨臺詞ゑて草鞋を解下手へ住ひ○久い跡ゑ東京へ來あすつた時逢た切其後音信不通故何處ゐ居被成か知あんだが夫じやア爰ゑ居被成のか(賢)お前ゑ逢のも面目無が知ての通遊過七年跡ゑ内を出て夫から諸縣を徘徊て是と云目途も無此頃爰へ泊込で何か商法ゑ取付ふと久敷日和を見て居升が文さんお前ゝ何仕あすつた(文)私も矢張同事悪い藝者ゑ引掛り遂々内を耗て仕舞生れ故郷の下谷ゑも居れぬ譯で餘儀無も女房子を跡へ殘し少し尋る者が有て石和邊迄行升のサ(賢)ソリヤアお前も詰らぬ事だが悪い藝者と言あさるゝ何所の藝者ゑ溺たのだ(文)數寄屋町の流行子新常磐屋の小松と言藝者ゑすつかり欺されました「言聲洩て奥の間より障子細目ゑ窺ふ小松ハッと驚ささす障子ト此内上手の障子を少し明小松文三を見て恟りせし思入ゑてそッと障子をぴる(賢)夫じやア其小松と言藝者ゑお前ゝ欺されたのか(文)我身の恥を打明て他人で無から言升が近所の事故松源へ初めて呼だが縁と成夫から所々へ呼だので發と世間へ浮名が立外のお客が呼ぬと聞意地ゑ掛つて毎日毎夜揚詰ゑした其果が月々溜る借金ゑ終ゑ仕舞ゝ首も廻らず寧の事ゑ身を投て死で來世で添ふと言無分別から向島の三圍下へ飛込ましたが川下ゑ居た網船の六右衛門と言人ゑ危い命を助けられ跡ゑて人の咄ゑ聞ば初手から小松ゝ死あぬ氣で履物斗り其處へ置言替して居る男の所へ逃て行たと言噂さ(賢)ヘテ其小松が言替して居る男と言ゝ何者だ(文)何處の者やら知あいが其名ゝ船木賢三郎と言て素性分らぬ者とやら是迄川岸の交際で藝者を買た事も有ば馬鹿ゑされあい了簡で居たのが矢張此方の己惚金を取れた其上ゑ命迄も取れる所神や佛のお惠で助つたから能けれど彼時死で仕舞たら世間の人の笑ひ草實ゑ悔しふムり升る「兄弟中ゑ打明て噺す内ゑも悔しさの見ゆる文三が敵とも言ゝ我身ゑ聞愛さト文三悔き思入賢三郎ゝ切あき仕打有て(賢)ソリヤア嘸悔しからふ腹の立のゝ尤だ然してお前が石和迄行のゝ何しゑ行被成のだ(文)其小松が生れた所が石和村だと聞た故古郷へ歸つて居やうかと尋ねゑ態〳〵來升たのだ(賢)尋る小松が親里ゑ居たらばお前何爲氣だ(文)存分恨みを言た上弄殺しゑ殺さねば私の心が晴ませぬ(賢)ソリヤア悪い了簡だ欺されたのゝお前の誤り弄殺しゑ仕たあらばソリヤア心が晴やうが折角お前が網船へ引上られて助かつた命を再び捨ゑやア成ぬへ(文)ソリヤ人を殺せば死罪ゑ成のゝ元より覺悟でムり升る(賢)妹の縁で言でゝ無が死ふと言ゝ跡ゑ殘つた女房子が難儀を爲も思つて居が男の意地故何有ても小松を殺して仕舞ねば死でも宙宇ゑ迷ひ升「拳を握り齒噛をおし然も悔し氣ゑ見ければト文三悔しき思入賢三郎も是非無思入ゑて(賢)夫程迄ゑ思ふなら幾等己が止た迚所詮止り被成まいから心の儘ゐ仕被成が宜(文)己から見ば年上のお崎が兄の太之助さんお前が斯して止て呉るを止らあいのゝ分らぬ奴と定めて思ひ被成だらふが死ふと言たが嘘だと聞てゝ何も小松を殺さねば悔しい胸が晴ませぬ(賢)然言事あら止あい拵殺て心を晴しあせへ(文)何で殺せば自首する了簡是限お前ゑ逢れるか逢れないゝ知ぬ體(賢)ソリヤ己迚も同じ事斯して居ても老少不定翌ゑも知ぬ人の身の上(文)夫も命が助つて(賢)生て此世ゑ居たあらば(文)退れぬ縁の兄弟中(賢)目出度再び(兩人)逢ませう「互ひゑ死る覺悟故是が別れと兩人が名殘を惜ひ門口へ此家のお六が立歸りト兩人宜敷憂ひの思入下手先見ず憎いと思ふ小松を殺しお前ゝ心が晴るだらふが跡ゑ殘つた女房が子供を加へ何位ゐ難儀を爲か知やア仕ねへそこを思つた事あらば殺すゝ思ひ止りあせへ(文)跡へ殘つた女房子が難儀を爲も思つて居が男の意地故何有ても小松を殺して仕舞ねば死でも宙宇ゑ迷ひ升「拳を握り齒噛をおし然も悔し氣ゑ見ければト文三悔しき思入賢三郎も是非無思入ゑて(賢)夫程迄ゑ思ふなら幾等己が止た迚所詮止り被成まいから心の儘ゐ仕被成が宜(文)己から見ば年上のお崎が兄の太之助さんお前が斯して止て呉るを止らあいのゝ分らぬ奴と定めて思ひ被成だらふが死ふと言たが嘘だと聞てゝ何も小松を殺さねば悔しい胸が晴ませぬ(賢)然言事あら止あい拵殺て心を晴しあせへ(文)何で殺せば自首する了簡是限お前ゑ逢れるか逢れないゝ知ぬ體(賢)ソリヤ己迚も同じ事斯して居ても老少不定翌ゑも知ぬ人の身の上(文)夫も命が助つて(賢)生て此世ゑ居たあらば(文)退れぬ縁の兄弟中(賢)目出度再び(兩人)逢ませう「互ひゑ死る覺悟故是が別れと兩人が名殘を惜ひ門口へ此家のお六が立歸りト兩人宜敷憂ひの思入下手

より以前のお六出て來り(六)モシ小松さんハト言掛ける(賢)アコレ○今こまつたとお前が言たい隣の内の氣遣ひかトお六ヨ呑込せるお六頷き(六)アヽ氣遣〳〵踊り出て困りましたト此内文三ハ草鞋を穿(文)夫あら兄さん(賢)急いで行ねへ(文)明るい内ヨ越れバ能が「文三ハ笠を打冠り峠をさしてト三重幽めて山下しヨて文三下手へ這入お六跡と見送り(六)今の人ハ何でムり升(賢)彼が小松ヨ欺された穂積文三と言人だ(六)左様とも知ず小松さんと迂濶言たい私が鹿忽(賢)此後も人が居たあらバ氣を付て言て呉ねへト山下し馬士唄の合方ヨて向ムより以前の七兵衛出て來り(七)アイ今歸りました(六)何ぞ忘れ物でもしたのか(賢)連て往た娘ハ何した(七)駕ヨ乘せて往た處あの子の内から探しヨ出た番頭殿ヨ途中で出合娘も大層悦んで又番頭も私しが受取升れバ送りヨハ及びませぬと止るから確り渡して歸りました(賢)ソリヤア東京迄往ねへで能所で出合たあ(七)其番頭か此内迄お禮ヨ參らヨや濟ませぬが兩親共ヨ夜の目も寐ず行衛を案じて居升れバ一刻も早く立歸り悦バせ度ムり升と禮の印と十四渡し何れ跡から上り升と直ヨ連て歸りました(賢)然して主人を聞て呉たか(七)聞ましたらバ疵所も治り健康ヨ成たと言ました(賢)ソリヤア何より有難へ○オ、小松が奥ヨ隱れて居やうモウ歸つたと言て呉ねへ(六)アイ承知仕ました奥へ這入(七)夫じやア十圓渡し升よト懷ろから紙包を出し賢三郎ヨ渡す(賢)思ひ掛ねへ金が出來たトバた〳〵ヨて奥より お六出て(六)モシ内ヨハお在で被成ませんよ(賢)文三が殺すと言を聞裏から外へ逃出たか(六)小松さんヨも似合ない逃成らず共能事を(七)イヤ居成らねへのハ調度幸ひ賢三さんも裏から山へ早く爰を逃なせへ(賢)ナニ逃ろとハ(七)目明し手合が爰彼所ヨ網を張て居る樣子だ(賢)夫じやア己の足が附たか(六)七さんお前も一所かへ(七)爰等が己も年明だらふ(賢)ドレ較替ヨ○ト立上るを木の頭○逃やうかト兵兒帶をゝる七兵衛ハ門口を窺ふ此見得時の鐘早さ合方山下しヨて宜敷拍子幕

明治十九年四月二十八日御届
同 六月七日出版 (定價金十八錢)
東京府平民 吉村新七
編輯人 淺草區馬道町二丁目十二番地
東京府平民 森直三郎
出版人 京橋區木挽町二丁目十三番地

廣告

河竹默阿彌翁作 蕙齋芳幾先生畫

○戀闇鵜飼燎 全部三冊揃
初編 序幕より四幕目迄 合本一冊
貳編 五幕目六幕目 合本一冊
三編 七幕目八幕目 合本一冊

○歌舞伎新報 毎月五號發兌
○毎號定價一部金三錢○十部前金二拾七錢
○三十部前金七拾五錢
但府外遞送の分ハ定規の郵便税ヲ受ル
右新報の儀ハ東京大坂其他諸國劇場の景況より各座新狂言筋書幷ニ評判藝道の古實俳優傳記雜話等都て演劇ヨ係る實事を集め且つ挿畫傍訓を加へ專ら婦女子ヨ讀易きやう書綴れバ毎號沙求め沙高覽の程伏て奉希上ル
東京京橋區銀座四丁目十六番地
歌舞伎新報社 伏稟

三代目中村秀鶴筆記
○絶句帖 全壹冊 定價 袋入美本金拾五錢
此書ハ當今俳優中ヨて老練熟達の名譽ある三代目中村仲藏秀鶴老人ゞ壯年の頃より多年見聞せし演戲上ヨありし絶句笑話を筆記したるものなり一讀して捧腹頤ひを解き再讀して俳優其人の伎倆を知らしめ反覆熟閲すれバ當時の演劇藝道の難易を追想し佳與ヨ入しひるの好書也今回飜刻出版すれバ各繪双紙店ヨて沙求め沙高覽被下度伏て奉願上ル以上
東京々橋區木挽町二丁目十三番地 三樹堂

●日本繪入新聞鼻祖 毎日刊行 (月曜日及大祭翌日休刊)
東京繪入新聞
○定價
壹ヶ月前金 壹葉 金壹錢五厘
金貳拾八錢 金八拾錢 金壹圓五十六錢
三ヶ月前金 半ヶ年前金
金八拾錢 金壹圓五十六錢
一ヶ月分
○郵便税
●毎日遞送 金廿五錢 ●月九回遞送 金拾八錢
一行廿五字詰
○廣告料
一日間 金五錢 三日間以上 金四錢五厘 七日間以上 金四錢
右の通候間新紙及廣告共澤山沙注文被下度ル也
東京々橋區尾張町二丁目二十番地
東京繪入新聞兩文社